
FateでIS

武器屋の店員 A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FateでIS

【Zコード】

Z5074Z

【作者名】

武器屋の店員A

【あらすじ】

主人公が、死ぬ 能力ゲット 転生という流れで、Fateに登場する能力をぶら下げるIS インフィニット・ストラトス の世界へ行く話。

主人公は人としてズレています。そして転生した主人公がただひたすらに無双するお話ではありません。さらにT-S要素もあります。

○（前書き）

描写？へつたくそですけど？

文章力？10年前に捨てましたけど？

s i d e …? ? ?

すぐ近くから悲鳴が聞こえる。

誰の？

分からぬ。

ぼんやりと空を見上げる。

見上げる？

いや、俺は前を向いているはず。

ああ、仰向けになつてゐるのか。

軽く息を吸う。

肺の中をガスの臭いが満たした。

近くに車でもあるのか？

視線を横にずらす。

眼に入るのは、鮮烈な赤。

なんだこれ。

ああ、俺の血か。

きつたねえなあ……。

s i d e o u t

s i d e : 神

さーて、困った。

目の前で煌々と燃え上がり、もはやダークマターと化した書類を見て、何度も目が分からぬ溜め息をつく。

「ハア……どーしようかなー……」

……ん？　あ、どーもみなさん「んにちは。え？　ボクですか？」

ボクは神です。つていうか上に書いてあるじゃないですか。神つて。それくらい知つておいてくださいよ。

……え？　知つてる？　あつそ。

つていうかちょっと聞いてくださいよ。実はボク、今ひじょーに困ってるんです。

ついさっき書類が燃えたんですけどね、その書類つていうのが『1人の人間の人生』が記された書類なんですよ。それが燃えるつてい

う事は、即ち『死』を意味するんですけど、まあつまるといふ、とある人間がさつき死んだんですよ。……え？ それの何が問題なかつて？

いや、ただ死んだだけならいいんですよ。問題なのは、その人間の寿命が70年近く残つてることなんですよねー。

「ほんと、なんで死んだんだよ……」

この時、ボクは田の前の処理に気を取られたせいで、あることに気が付かなかつた。

実は書類は2枚重なつていてる状態で、燃えたのも当然2枚だつたということに。

……うるせこな！

神様だつて全能じゃないんだよー。

s i d e o u t

○(後書き)

黒髪つていいよね。

1 (前書き)

ただ助けを待つだけなのか？ただ流されるだけなのか？

じゃあお前は一体何のために生まれてきたんだ？何をして生きた証を刻むんだ？

何かを為す自信が無いのか？何もしないまま終わるのか？分からな
いまま、答えられないまま終わるのか？

ただ待ってるだけじゃ始まらない。ただヒーローを待つだけじゃ何
も変わらない。今を変える方法は一つ。

他の誰でも無い、お前がヒーローになるんだ。

アンパンマン

何も無い、ただ限りなく白が広がる空間。

そこに立つ一人の少年と一人の子供。

少年の方は学生服に身を包み、その眼はどこか虚ろで、見ていると吸い込まれそうになる。きっと変わらない吸引力を誇るに違いない。

対して子どもの方は、『NICE』と書かれたジャージを着ている。無論、上下セットだ。ちなみにオレンジ色である。

以下、子どもをNICE、少年をダイソンとする。

NICEがダイソンを上から下までじっくりと眺め、口を開いた。

「えーっと、山田幸助ヤマタ ハクスケくんだよね？」

山田幸助と呼ばれた学生服の少年　ダイソンは、NICEの問いに対し、まったくの無表情で返す。

「はい」

……二人の間に生温い沈黙が流れる。

先にギブアップしたのはNICEだった。

「あ、あのせ、やけに反応薄いね」

「ええ、まあ」

……再び沈黙が支配する。

「えーっと、TPPって何の略か知ってるかな?」

「ちん っぽ」

……。

「あー、そのー、とりあえず現状を伝えるけどね? ボクは神様で、キミはもう死んじゃったんだよ」

「そうですか」

自身の正体と、相手の状態を明かしたにもかかわらず、それでも一向に表情を崩さず、平淡な声色で返し続けるダイソンに、NIKEはどうか恐怖にも似たを感じていた。

(なにこの人間。正直気持ち悪いんだけど。つていうかここまで会話のキャッチボールが成り立たないなんて……)

しかし、このままというわけにもいかない。

NIKEは気を取り直し、再び言葉を投げかける。

「た、確かにキミは死んだんだけじね? 人間には押し並べて『天寿』っていうものがあるんだ。でもキミの場合、その天寿を全うする前に死んじゃったんだよね」

しかし、

「へえー」

ダイソンはNICEからのボールを全力で地面に叩き付ける。フオークなどというレベルではない。キャッチボール？ 何それ？ 的な状態じゃないではない。

引きつづった表情を浮かべながらも、NICEは必死に食い下がる。

「キミが死んだ年齢は16歳。でもキミの本来の寿命は88歳。つまり、キミには最低でもあと72年は生きてもらわないといけないんだ」

「……なんですか？」

！ ！

NICEは密かに達成感に浸りながら、ダイソンの放つた問いにたいして返答する。

「いや、なんでも言われても……。ルールだからとしか言ことようがないなあ」

「誰がどのような理由の下で定めたのかも分からぬようなルールに従えと言つのか？」

突如として早口で饒舌にまくしたてるダイソン。一体どうしたというのだ。

「えつ、いや、だか」「ふん、馬鹿馬鹿しい。結局神といえど、他人が勝手に作ったわけのわからないルール一つまんならんとはな。そうやって自分が何のために何をしているのかも分からぬまま朽ちていくがいしさ」

さうに口を高速で回転させるダイソン。傍から見れば、高校生が小学生をいじめてくるようにしか見えない。

「大体、俺は死んだのならそれはそれで構わん。さつさと地獄なり、どこへでも連れて行け」

なぜ行き先が地獄一択なのだろうか。といふか登場から一話も経っていないにもかかわらず、早速キャラ崩壊を起こしている。

NIKEはダイソンの剣幕に、若干涙目になりながらも声を張り上げる。

「だから… そういうわけにはいかないんだよ！ キミは最低フツ年は生きなくちゃいけないの！ その後は好きにしていいからさあ！」

「黙れ。面倒だ」

「生きるのがめんどくさいってどうしたこと！？ っていうがキミの死因からして意味不明だよ… なんなんだよ！『気が付いたら車道にいて、気が付いたら車にはねられる』って！ そんな投げやりな死因初めて聞いたよ！」

「そうか。奇遇だな。俺もだ」

「うがあああつー。なにコイツ本当じめんぢくわこー。ねえもう頼むから早く転生してよー。転生後の世界もステータスも決めさせてあげるからさあー。」

「おーこーとわーりしますー。おーこーとわーりします断固

「そんな微妙にマニアックな曲よく知ってるねー! 正直『だが断るの!』って来ると思つてたよー! つていうか断らないでよー!」

「おーこーとわーりーしーまーすー。』遠慮しますー」

その後もひと悶着あり、なんとかダイソンの説得に成功するNIKE。

ちなみにこの間、ずっとダイソンは無表情を崩すことは無かつた。

さて、気を取り直して

「……それで? キミはどんな能力が欲しいの?」

NIKEは顔面の筋肉全てで疲労を表現しながら訊ねる。

対するダイソンは相も変わらず無表情だ。

「あ？ ああ、別になくてもいいかなー」

「いや、キミは何の能力も無い状態で行つたら『つまらん。飽きた。死のう』とか言って自殺しそうじやん。一応ボクからも妨害はするけどさ、それじゃあ意味が無いんだよね」

なんと鋭い洞察力であろうか。さすがは神。

NIKEの言葉に、ダイソンは何やら思索するように顎に手を当て、「…………そうだな…………じゃあ、Fateのバーサーカーとアーチャーのスペックが欲しい」

「スペック？ まあ良く分からぬけど分かったよ」

「あ、ちなみに4次と5次両方で頼む。一回やつてみたかったんだよねー。ゲートオブバビロン、みたいな…………つてちょっと待つた」

ダイソンはNIKEにそう言つと、一人思考に陥つた。

(4次と5次つて言つたけど本当に両方いるのか？剣製が出来ればバビロンいらなくね？役割かぶつてね？いやでも待てよそもそもバビロンは発動者の保有する財によつて威力は変わるわけだから俺が使つても意味が無いのかいやそつとは限らないスペックの中に財が入つていれば十分運用可能だむしろ剣製の方が心配だな剣製はアーリ

チヤーの知識と記憶があればこそ可能なのであつて俺なんかが技術だけ持つても仕方が無いしつまりギル様の財があれば万事解決か?
?……うーん)

わずか1秒程で思考を切り上げ、N H K Eに向き直るダイソン。なるほど、確かに気持ち悪い。

「とりあえず、さつき書いたスペックの中にエミヤの持つ知識とギルガメッシュの財、この両方を含めてくれ」

「???? あー、うん。了解」

N H K Eは頷きつつも、実際にはよく理解していなかつた。子どもには早かつたようだ。

「えつと、それじゃあ転生する世界は、そのF a t e?の世界でいいの?」

しかし、そこで肯かないのがダイソンである。

「いや、アニメとか漫画の世界に行けるつていうなら、E U I の世界に行きたい」

「……アイエス?」

「インフィニット・ストラトスだよバカ」

1(後書き)

筋肉筋肉

2（前書き）

私は知っている。世の儻さを。
私は知っている。限りなき苦しみを。
私は知っている。“力”的行く末を。
私は知っている。私の人気を。

モッパー

「おー！ バスしろよー。」

ボールが規則的に跳ねる音と、室内シューズと床の摩擦音が耳に鬱陶しくまとわりつく。

「おい、デュエルしろよー。」

「うつせー蟹！」

ああ、本当に五月蠅い。

”私”は伏せていた顔を徐々に上げた。

眼前に広がるのは、運動部が調子に乗る暑苦しい光景。

今は体育の時間。種目はバスケ。場所は某中学校の体育館。本来なら別々の場所でスポーツに興じるはずのこの時間。しかし今日は珍しい事に、男女の場所が偶然重なったのだ。

ちなみに私は隅っこで体育座りをしている。

何故か。答えは簡単。仮病を使って見学にしたのだ。

具体的には、

「安西先生、バスケとかだるいです」

「じゃあ八神さんは見学だね」

といったやりとりが先程なされた。

と言つても、別に本当にバスケがダルかつたわけでは……「ん。やっぱりダルかつたわ。

つてそういうじやなくて、体育を見学しているのにはそれなりの理由がある。

その理由とは、即ち私のチート能力である。

私が参加すると、それは最早スポーツではなく、一方的な蹂躪となるのだ。

故に、私は見学に徹している。

ピッ！

甲高い笛が鳴り、「コートに入っていたクラスメート達と、脇に待機していたクラスメート達に入れ替わる。

私はそれをぼんやりと眺めながら、特に何も考えていなかつた。

すると不意に、私の前に人の気配が現れた。

「ユウはまた見学？」

そう言つて私に声をかけてきたのは、クラスメートA。

名前は……なんだっけ？

「う～ん、参加したいんだけど……。ほら、私が参加したらわ……」

「まあ確かに、コウが入ったチームは絶対に負けなくなるもんね」

私の身体能力についてはクラスの誰もが知ることである。なので、今となつては体育不参加の私を咎める者は一部の例外を除いて殆どいない。

そう。一部を除いては。

「ちょっとコウ！ サボつてないで入りなさい！」

再び私を呼ぶ声がする。地平線の彼方から、ビックバンの彼方から、私を呼んでる声がする。

あー、めんどくさー。

「いや、でも「でもモモクラシーも無い！ いいからそいつのチームに入つて！」

私が断りつつ声を上げるも、それを遮る甲高い声が体育館に木靈する。

その声の主とは……

「鳳さんも懲りないねえ」

誰かが呟いたがその通り。一部の例外にして声の主とは鳳鈴音ファンリンインその人である。

こげ茶髪、ツインテール、黄色いリボン、低身長、ちっぱい。

このくらい特徴を挙げれば十分だらう。

彼女には何故か毎度の如く田の敵にされている。

いや、田の敵といつよつ、「ことある」とに突っかかるのだ。

私が何をした。

「……はあ。仕方が無い

私は嘆息し、犬歯をむき出して威嚇しているお姫様のもとへとだらだらと歩を進む。「なにしてるのよー。早く来なさい!」駆け足で向かつた。

さて、遅くなつたが、物語の開始を告げよ。

この物語は、かつては山田幸助（ ）、今は八神 優（ ）である私が、主人公、織斑一夏を殴つ血KILLし物語である。

2（後書き）

あー、ホント分かりにくいいなー。

主人公の紹介 ～本当はこんな章、作りたくなかったよ～（前書き）

主人公の紹介です。かなりのクズなので、読者に嫌われること間違
いなし。

主人公の紹介 ～本当はこんな章、作りたくなかったよ～

名前：八神優ヤガミ ユウ

性別：女

年齢：現時点で13才（リン、一夏と同じ学校）

容姿：

腰まで伸びた黒髪に、同色の虹彩。

身長は一夏よりも若干低い程度。

スタイルはそれなりに良く、何がとは言わないが、大きめである。神から押し切られる形で貰った能力を使用すると、虹彩が赤色に染まる。

最初は「厨二っぽい！ かっけー！」と、テンションが立ち上がり一々だつたが、2回目に気付いた時はすでに冷めていたのか、特に何のリアクションも示さなかつた。

性格：

天の邪鬼。それでいて面倒くさがり。

綺麗な言い方をするならば、『あまり出しゃばらず、どちらかと言うと控えめ。能力の関係上、自分が何かをすると既に結果が決まってしまう（例えば体育では無双してしまう）ので、極力何もしないようにしている。しかしそんな中にもしっかりと芯を持つており、他人や周囲に流されるのを嫌う』といったところ。

一応外面はいいようで、キャラもがつたり作りこんでいる。

本人は愛想笑いとポーカーフェイスに絶対の自信を持っており、曰く、それが対人関係において最大の潤滑剤であるとのこと。

好き：音楽鑑賞（V系と電波ソング）

嫌い：虫、他人、自分、鈍感主人公、努力、人の多い場所、流行

能力：

エミヤ、我様、巨人、甲冑の能力を持つ。

具体的には

- ・投影魔術
- ・無限の剣製
- ・王の財宝
- ・武芸百般をこなすセンスと身体能力
- ・アーサー王をも凌ぐ剣術
- ・拾った武器でも宝具クラスで扱える能力
- etc . .

しかし、渡すべき能力の取捨選択が出来なかつた神のせいで、本来はあまり必要の無い余計なものまで付いてきている。

- ・赤い弓兵の家事、主人公スキル（朴念仁的なアレも含む）
- ・黒いデカブツの履かないスキル（基本的に家では履いてない）
- ・金ぴかAUCHの慢心スキル（慢心せずして何が王か！）
- ・基本的に自分を責め、他人に許されると不安になる（何故罰さないのですか！）

- ・単独行動＝協調性の無さ（何者にも縛られない俺、マジカッコイイ）

etc . .

その他：

自殺が出来ない。事故死もしない。最低72年間生きることが既に決まっている。

こんなもんかな？ あとから追加するかもしれないです。

主人公の紹介 ↗ 本当はこんな章、作りたくなかったよ（後書き）

I am the bone of my sword.
私は剣の骨です。

3（前書き）

何と言われたって、それがどうしたと。
誇れるものがあるなら、どんなもんだと。

前を向いて、僕は僕なんだと、胸を張り続けるんだ。

そうしていれば、君は一人だって大丈夫。

僕が居なくとも、君は未来へ歩いて行ける。

ドラえもん（田）

時は遡り、入学式

まだ少し肌寒いこの季節。風に舞う桜の花びらを視線で追いながら、新たな学び舎となる場所へと足を踏み入れる。

俺が私となつて、12年が過ぎた。

最初こそあの糞餓鬼（自称神）を再起不能に追い込んでやろうと思っていたが、今となつては八神優である事にすっかり慣れていった。

と言つても、自分が女であることや、八神優といつ者的存在を肯定するつもりは毛頭ない。

『慣れた』といつのは、『八神優といつキャラクターを演じる事』に慣れたという話だ。

がらんどうな俺を覆うハリボテ、それが私。そう割り切ることで、私はまだ俺でいられる。

「あー、コウ！ わはよー！」

校門を過ぎた所で、誰かが手を振りながらこちらに近づいてくる。誰だあいつ。確か小学校の頃にも見たことがあるような気がしなくもない。相手の態度から察するに、自分と彼女は知り合いなのだろう。

「うん。 おはよー」

顔の筋肉を動かし、柔らかい微笑みを形作る。ラグもムラも作るな。
無理にでも自然な笑みを作れ。

今の私はハ神優だ。

「もうクラス表って見たの？」

彼女……仮にAとする。Aは私の顔を覗き込むようにして訊ねてくる。ちょ、顔近い。邪魔。

「うん、まだ見てないよ。そういうえばクラス表ってどこにあるの？」

完璧な切り返しだ。さすが私。

そしてこの後の流れも容易に想像できる。といつかそういう展開に持つていくための私のセリフなのだから。

すばりその展開とは、これから一緒に見に行く。或いは張り出されている場所まで案内してもらえるに違いない「それがアタシも分からないんだよね~」

なんだと？

「ユウなら知ってると思つたんだけど……うーん、どうしよう？」

Aはへらへらと軽く笑いながら頭を搔く。……ふう、少し落ちつけ。
私は今、八神優だ。ならば完璧であれ。

内心でAに役立たずの烙印を全力で叩きつけ、先程と変わらぬ完璧な笑みを浮かべる。

そして私はこの状況を開拓すべく、ある提案を掲げた。その打開策とは……

「じゃあさ、あそこに行こう人に聞いてみようよ」

そう。他力本願である。何か文句でもあるか？

余談だが、他力本願とは本来、仏教用語で『阿弥陀如来の本願力による淨土往生』を指す。平たく言えば、『自力で極楽に行けるなど思い上がりも甚だしいわ！』ということである。つまり、他人に頼りきり、主体性が欠如している状態を指すのは厳密には誤りである。

さらに余談だが、この『余談だが』という解説文は遼ちゃんがよく使うものである。遼ちゃんが誰か分からない人は、歴史好きな

お祖母ちゃんにでも聞いてみよ。

閑話休題

私が指をさした先 そこには1人の男子生徒の背中がある。

その男子生徒は、どうやら入学案内のプリントを読んでいるようだ。きっとそこに校舎の見取り図的なものがあるに違いない。いや、あつたらしいね。

分かりきっていることだが、私達2人はそのプリントを持ってきていない。私に関すると言えば紙飛行機にして窓から飛ばした。ホントに何をしているんだ私は。AUOの慢心スキルでもつづたか？……いや、関係無いか。

私はAを連れ、その男子生徒の元へと歩み寄った。

「あの、すいません。ちょっとといでですか？」

少しどこか案内までさせるつもりだけな。

私はそんな内心は一切外には出さず、男子生徒の返事を待った。

この時、私は何故この男子生徒に声を掛けてしまったのだろうか。

元男であることが原因で、無意識のうちに男の方が話しかけやすいと思ってしまったのかもしれない。もしくは、それこそ慢心していたのかもしれない。慢心と言つより、油断、平和ボケと言つた方が

適切か。或いは忘却か。

私はこの時まですっかり、この世界が何なのかといつじとを失念していたのだ。

いずれにせよ、私はこの選択を……ひいては、この先起こるであろう未来、そしてそれに自分が関わってしまうという事を激しく後悔するはめになる。

私の声に気付いたその男子生徒が、ゆっくりと振り返る。

「ん？ どうしたんだ？」

そう言って二「」こと厭味の無い笑顔を魅せる男子生徒。対照的に、私の笑顔は凍りつく。

忘れてた

やつちまつた

Oh . . .

様々な言葉が脳内を飛び交う。だが待て八神優。フリーーズしている場合じゃない。私は八神優なのだから、この程度で動じるわけにはいかない。

「実はクラス表がどこに貼り出されているのか分からなくて……」

脳から指示を出し、口を動かし、言葉を紡ぐ。それだけの動作がひどく困難に感じる。

「だつたら一緒に行こうぜ？ 僕もちょうど行くところだからさ」

「ホント！？ ありがとー！」

隣にいるAが、やたらと高いテンションで了承する。そりやあ、運よくイケメンが引っ掛けたんだから、テンションも上がるか。

私は2人と共に、校舎の中へ入っていく。

これが私と、この世界の主人公 織斑一夏とのファーストコンタクトである。

3 (後書き)

あつたまてつかていか
さえーてぴっかぴーか
そーれがどうした
ぼくドラえもん

4（前書き）

てめえはずつと待つてたんだろ！？ 不幸でみじめな道化で終わらないで済む、ジャイ子を嫁に取らなくて済む……そんな誰もが笑つて、誰もがホンワカパッパするハッピー エンドつてやつを。

お前だつてしづかの方がいいだろ！？ ジャイ子なんかで満足してんじゃねえ、命を懸けてしづかの風呂を見てえんじやないのかよ！？ だつたら、それは全然終わつてねえ、始まつてすらいねえ

ポケットを漁れば叶うんだ！ いい加減に始めようぜ、のび太！！

ドラえもん（新）

「あつ、そういうえばまだ名乗ってなかつたな。俺は織斑……織斑一夏つていうんだ。お前は？」

隣を歩く黒髪の少年の間に、今までどおりの笑顔を浮かべて応答する。

「八神優です。これからよろしくね？ 織斑くん」

少年 織斑一夏も同様に笑みを浮かべる。それも、私の様な紛い物ではなく、本物の綺麗な笑顔だ。

「ああ、じつらじやようしへ」

彼の笑顔に中でられたのか、視界の脇で頬を赤らめる女子生徒がちらほらと見える。驚くべきことに、その中には男子生徒も交じっていた。アツー！

さて、どうしてこうなった。

今私はこの男と2人で廊下を歩いている。というのも、先程クラスを確認したところ、Aだけが別のクラスで、私とコイツが同じクラスだったのだ。この時Aが何やら文句を垂れていたが、なんだかんだと言いつつもAは先に自分の教室に入り、こうして私と、隣の鈍感野郎が取り残されるという展開になつたわけだが……

正直、この状況は私にとって好ましくない。

何故か。別に難しい話ではない。

一つ目に、私が本筋に関わると面倒そうだという事。イベントの内容が変わることで、予期しない死人が出ても不思議ではない。それから、これがかなり重要なのが、私は『主人公』という生物が嫌いだ。ヤツらを見ていると非常に腹が立つ。

強引なフラグ建築、謎のイケメン力発動、それに簡単に靡くヒロイン達、非常に腹が立つ。というか理解不能だ。自分が正常だなどと言つつもりはないが、ヤツらも相当に変（態）だと思つ。だから、極力この男とは関わりたくないかったのだ。

『 I Sをチート能力使つて生身の状態でフルボッコにしてやんよ WWW 』

などと考えていた転生直前の自分をフルボッコにしてやりたい。何でこんな世界に転生したんだコンチクショウ。どうせならT O H e art 2とかマジ恋とか俺ツレとか朝色とか恋チョコの世界にすれば良かつた。

「おひ、あそこじゃないか？」

そういう感じでこるつむり、目的の教室へと辿り着く。

私は先程クラス表を確認した時に目にした名前を思い出し、密かに溜め息をついた。

どうせ教室に入るとすぐそこそこいるんだろうなあ……。

そんな事など知った事ではないとでも言つよつに、隣にいるイケメソが何の躊躇いも無く扉を横に滑り、「遅いー、何してたのよ！」ああ、やつぱりね。

田の前で黄色いリボンで結われたツインテールが、その名の通り尻尾のよつに揺れている。意志の強そうな双眸は、ただ一人の少年へと向けられている。そう、隣にいる織斑一夏に吠えているこの女子生徒こそ、私が作中であまり好きになれないキャラクター　鳳鈴音だ。

「わりいわりい、実は時計の時間が少しづれててさ……」

そう言いながら手を合わせ、頭を下げる一夏。すると、鈴の後ろからひょっこりと別の男子生徒が顔を出した。

「まあ、一夏もいづり言つてゐし、許してやれよ」

長めの赤毛に、黒いヘアバンド。確か名前は……あーだめだ。忘れした。

名前が分からぬので仮に赤毛君としよう。赤毛君は、そういうえば……と呟き、こちらに視線を向けた。

「そつちの女子は？　一夏の知り合いか？　ハッ！　もしやまた……」

「またつて何だよ。ただ案内しただけだつて。つと、そうだ八神、紹介するよ」

そう言つて今度は一夏までもがこちらを向いた。というか先程から

ツインテチャイ一ーズがこちらを睨んでいるのですが。正直恐いのですが。

「「」ちの赤毛が五反田弾、で、ツインテールの方が鳳鈴音。2人とも小学校の頃から一緒なんだ」

紹介を受け、「ゴタンダダン」と呼ばれた男子生徒が「よろしく～」と軽い調子で告げる。

対して鈴の方は、まったく笑顔になつていない笑顔を張り付けている。目が笑つてないというか、口の端が不自然に釣り上がっているだけだ。引きつった歪な笑顔のまま、私に向けて口を開いた。

「よろしく。それで一夏?」「の子とはどういう関係?」

「だからここまで一緒に来ただけだつて!」

一夏の言葉に、鈴はそれでも尚カシストする程の猜疑心を孕んだ視線を寄こしてくる。赤毛も鈴程ではないが、私に何かを期待するような目を向けてくる。どうやら私も自己紹介をしなければならない流れの様だ。

というか視線が痛い。痛すぎる。つていうか胸に物凄く突き刺さります。どこ見てるんですか鈴さん。

「えっと、さつきも織斑くんから名前が出たけど、一応紹介するね。私は」

私は再び笑顔を作り、無難な挨拶の口上を垂れる。

とりあえず私に今学期の目標が出来た。

何とかして鈴の誤解を解く事だ。具体的には、織斑一夏に恋愛感情

を抱いていない」と告げる必要がある。

でも突然そんな事を言つたら逆に怪しくないか？ というか鈴の気持ちをどうして知ってるんだっていう話になるし、これはかなり言うタイミングが難しいな。

はあ、めんどくせこ……。

4（後書き）

この小説モードキに対して下手に期待を持つことはあまりお勧めしません。
何故なら、この小説モードキの作者は読者の期待を悪い意味で裏切る
からです。

A 「（うわ……なにコイツ恐い）あ、ああ！？ なんだテメエ！」
 B 「（ゲッ、見るからにヤンキーだ…）つや、やんのか？ あ？」
 A 「（なに）コイツめっちゃやる気なんですけど。マジ怖いんですけど）テメエ俺はアレだしおめえ。俺がアレだって知つて言つてんのかテメエ」

B 「（え？ 何？ もしかして不良界では変な異名で呼ばれてるクチですか？ ヤベえ俺オワタ）あ、ああアレね。知つてるし。知つて言つてるし。ていうか俺こそアレだし。えつ、何？ お前俺のこと知らねえの？ それちょっとヤバいし」

A 「（うわああ！ 有名人だつたああ！）は、は？ 知つてるし、ちょー知つてるし。も、もう怒つたし。テメエ逃げるなら今のうちだぞ？ マジで俺キレたらヤバいから。病院送り確定だから（俺がな）」

B 「（なんか怒つてるうう！ いやああ！）は？ 俺の方がキレたらヤベえし。俺実は裏では漆黒の騎士つて呼ばれてるし（厨二時代のコテハンだけどな）」

A 「（何それこええええ！ ってか超強そうじやん！ マジで帰りたいんですけどおお！）あ、ああソレね。聞いたことあるけど大したことねえし。俺も似たようなの持つてるし。むしろ俺の方がすすぐーし。俺はフォカヌボウ本田つて呼ばれてるし。と、とにかくもう謝つてもおせえから。マジぶっ殺すから。（もうこうなつたら勢いに任せるとしかない…！）うつほおおい！」バツ！

B 「（何か構えたああ！ いや死ぬ！ 俺死ぬ！）そ、その構えなら知つてるし。あ、アレだろ？ ナント力真拳的なアレだろ？ つてかアレだし。俺の兄貴の方が上手いし。俺の兄貴それの全国大会で優勝してるし（俺は何を言つてているんだ…）」

A 「（全国大会あんの！？ てかこれって公式！？）は？ 俺だつ

てしてるし。つていうか実はお前の兄貴の師匠俺だし。マジお前終わ
わったよ（俺も終わる）」

唐突に飽きた。

「くじ引きの結果、クラス委員は織斑君と八神さんに決まりました
～！」

「……え？」

黒板を背に、担任の女教師が高らかに宣言する。直後、教室内の空気が弛緩していくを感じた。

しかし対照的に、内心でダラダラと冷や汗をナイアガラもびっくりの勢いで流す生徒が1人。

無論、私である。

時は流れ、今はホームルームの時間だ。ちなみに入学式は電光石火の早さで終わつた。というのも、用意された椅子に座り、校長先生とやらの演説が始まつた途端、気付いたら終わつていたのだ。何を言つているのか分からぬと思つが、恐らく誰かがキングクリムゾンを発動したのだろう。式典中にスタンンド発動とは不敬極まりない。決して私が寝たわけではない。

まあそれはさて置き、私は目の前で告げられた核爆弾級の現実に、密かに教師に向けて中指を立てた。ふあつく。

今朝、入学式が始まる前に一夏を始めとした3人の邂逅は果たした。その際に五反田弾や鳳鈴音とも挨拶を交わしたのだが、どうもチヤイナ娘の方は、私がおりむーさんには意を抱いていると誤解しているらしい。誠に遺憾である。

そこにきて私と織斑一夏がクラス委員に選出されたこの状況。これでは不本意な誤解が音速を超えて深まっていくだけである。というか先程から物凄く熱烈な視線を感じる。主に凰さんの方から。もはや罰ゲーム以外の何物でもない。

まったく、私は神に嫌われるような事をしたのだろうか。……あつ、してたわ。

だがまあ、気にしたところで仕方が無い。

「何かと縁があるみたいだな。八神、改めてよろしく」

隣に座る男子生徒 織斑一夏が、見る者を魅了するイケメンスマイルを私に向ける。

「うん、よろしく。織斑くん」

私も幾度となく張り付けてきた笑顔で対応する。ちなみにこの時、クラスの女子の頬が朱に染まったのは言うまでもないことだが、廊下の時と同様、なんと男子生徒にも同様の症状が見られた。ISの主人公が男をも虜にするとは知らなかつたな。

私は彼と笑みを交わしながら、脳内で思考を切り替えていた。
突き付けられた避けようの無い未来を受け入れることにし、後悔するのではなく、これからいかにして原作の流れからこの身を遠ざければ良いのかということを考えるといった風に。

しかし、私の目論見がいかに甘かつたのかを、私はこれから的生活で知ることになる。

それから数日が過ぎた。

クラス委員という関係上、どうしても一夏と関わる時間が大きくなつていく。

そうなると、他の2人 五反田弾と鳳鈴音の両名とも共に過ぎ去る時間が増えるのは自明だった。

原作の流れにあまり介入したくないという私の思惑とは、全力で正反対の方向へと事態は進展していく。

しかし同時に、この状況はチャンスでもあった。そつ、鈴が私に抱いている誤解をそげぶするチャンスだ。

「あの、凰さん？ ちょっと話が……」

「なに？」

「……な、なんでもないです」

まあ、そう簡単にいくわけがないですよねーははは……はあ。

しかし事態の悪化は止まらない。

ある日、本当に何の因果か、私は偶々鈴と放課後の教室で出くわした。しかも2人きりだ。

今度こそ誤解を解くチャンス！ そう意気込み、私は口火を切った。さあ、貴様のその誤解を完膚なきまでに粉碎してくれよう。

「ねえ、凰さん」

空は匂の顔を潜め、赤く染まつてゐる。

「……なに？」

遙かな境界線に沈みかけ、黄昏へと迫る太陽に、凰鈴音はその不機嫌さの塊の様な顔を照らされながらこちらを向く。

私はいつも通りの笑顔を作り上げ、今までずっと胸に秘めていた言葉を吐き出した。

「凰さんって織斑くんの事が好きなんんじょ？」

「なつ…………」

安っぽい爆発音の様な音と共に、彼女の整った貌は夕陽よりもなお赤く染め上げられる。……はて、言葉を選び間違えたか？ まあどうでもいいが、結果を出すせねば。

私が一の句を告げようとするよりも早く、彼女はやや顔を俯かせ、何やらふつぶつと囁き始めた。

「わざわざ確認を取つてたつて！」とせ……やつぱり「ハイツも一夏の事を……」

「あ、あれ？ 鈴音さん？」

数秒の後、ツインテールに纏めた髪を揺らし、勢いよく顔を上げる。

「分かった。アンタがこれほど大胆不敵なヤツだとは意外だつたけど、相手にとつて不足は無いわ」

ん？ ん？

んん？

何をどう曲解したのか。恐らく田の前の少女はかなり混乱しているのだろう。そうでなければ、今の言動に説明がつかない。そしてパニックを起こしているのは私も例外ではなかつた。脳内で、どうしてこうなつた のAAがいくつも表示されている。

状況の進展に着いて行けず、田を白黒させる私に向かつて、小柄な少女はスッと手を差し出した。

「あたしはアンタを対等なライバルとして認めるわ。といつわけによろしく。あたしの事は鈴^{リン}つて呼んで。あたしもアンタの事はコウつて呼ぶから」

「え？ あつ、はい。よろしく？」

思わず手を取る私…………つて違うー。

「それじゃ、アイツ相手じゃこりこりと苦労すると思ひたゞ、お互
いに正々堂々と頑張りましょー！」

「いや、あの」

「じゃあね～」

彼女に向かつて伸ばした手は何も掴み取る事は無く、ただ静寂のみ

がそこにあつた。

ああ、ホント最悪。

そして今田結ばれた不可思議な同盟のせいで、私は翌日から彼女に名前で呼ばれるようになる。

彼女にそう呼ばれると言つ事は、必然的に一夏氏の前でもそう呼ばれると言つ事であり、気が付くと彼からも同じように呼ばれるようになつていて。（その呼び名は後にさらに広まり、最終的にクラスのヤツら全員からそう呼ばれることになる）

結局、離れていくつもりが、寧ろ距離が縮まり、誤解を解くつもりが、さらにその誤解を強固な物にしてしまつたのだ。やることなす事が力いっぱい裏目に出了のであつた。

本当に、どうしてこうなつた。

5（後書き）

展開が我ながら強引過ぎる。というか文字数の感覚を早く掴みたい。

6（前書き）

確かに世界を救った事はある。それも一度や2度じゃない。
英雄なんて言えば聞こえは良いかもしれないが、毎回誰かに助けられて、自分だけでは何も出来なくて、いつも己の無力感にぶつかっていた。

出来たことと言えば、ただ信じることだけだった。
自分はすごい、天才だ、人気者だ。ただひたすらに我武者羅に、そう信じてここまで来た。

野原しんのすけ

その少年は何もしなくても何でも出来た。

勉強なんてしなくてもテストでは常に満点を叩きだし、練習なんてしなくともスポーツでは同世代の子供のレベルを遥かに超えていた。少年の導きだす答えは常に正しかった。彼の両親も少年を褒め称えた。

お前は天才だ、と。

そんな少年が、周りから何も思われていない筈が無い。

そしてその少年が中学に上がる頃、事件は起きる。

事件と言つても大したものではない。ちょっとした子供も同士の喧嘩だ。

体育の時間、野球部のエースを確約されていたとある男子生徒が、件の少年に三振で打ち取られたと言うだけの話。

男子生徒は何の努力も無い、ルールすら口クに知らないようなド素人に敗北したという事実を認める事が出来ず、癪癥を起し、少年に暴力を振るつた。

たつたそれだけの事だった。

少なくともこの時、何でも出来た少年の眼にはその程度の事としか映っていなかった。

今にして思えば、その時から既に、少年の中で何かがズれていたのかもしれない。

その後、その男子生徒は野球から逃げるよう退部した。暴力を振

るつてしまつた事に対するケジメでもあつたが、何よりも、単純に自信を喪失したのだ。

野球の才能を認められていた彼は、その才と期待に恥じぬよう、誰よりも早く、誰よりも多く、誰よりも強固に、努力と研鑽という煉瓦を堆く積み重ねていた。

その塔はどこまでも高く、彼もまた、己の築き上げた物が他の者に負ける筈は無いと自負していた。

しかしその自信という名の煉瓦の塔は、突如として現れた1人の天才によつて木端微塵に碎かれる。それもその天才は、経験だけならド素人に等しいのだから、精神的衝撃は殊更である。

これで自信を失うなと言つ方が無理であろう。

野球を奪われた彼には何も残らなかつた。

何をやつても身が入らない。何をしていてもあの少年の影がまとわりつく。

あの少年なら自分よりも上手く出来るのだろう、と。

それは野球にしても同じだつた。

退部しても、彼は野球が好きだつた。いや、彼には野球しかなかつたのだ。しかし彼が野球をしようとする度、試合を観戦する度、あの少年に負けた時の記憶がフラッシュバックする。彼は野球そのものに恐怖を覚えていた。

自分にはもとより野球しかないのだ。にもかかわらず、素人に対する敗北した自分には何がある？ こんな自分がここにいていい理由があるのか？ 存在している意義とは何だ？

思考と疑問が己の中で徐々に膨らんでいく。それらはただ蓄積され、

あつという間に器を満たした。器が満ちれば待つてゐる未来はただ
一つ。

彼は自らの命を絶つた。

スポーツに全力を注いできた者が、何かしらの要因でスポーツが出来なくなり、それを苦にして自殺を図る。どこぞの物語にでもありそうな筋書きだ。しかし、今回はそれとは違つ。

そこには明確な”悪”があつたのだ。

当然、彼の仲間はその天才を責め立てた。それに便乗し、普段からその天才に不満を抱いている者たちも非難の声を投げつけた。

その責められた少年自身は、胸に感じる確かに痛みに首を傾げつつも、何故自分が非難を浴びせられているのか分からなかつた。

その少年にとって、勝利とは当たり前の事であり、自分に必然的に与えられるべきものだと信じて疑わなかつたからだ。

やがてそれは教師の目にとまり、保護者を交えての懇談会へと発展する。

少年は担任教師と両親、そして例の男子生徒の両親、野球部の顧問を前にして、自身の正当性を主張した。

ただ自分はいつものようにやつただけだ、と。

天才と呼ばれた少年は自分に罪は無いと確信していた。しかし、直後に首を垂れたのは彼の両親だった。

少年はその姿に衝撃を受ける。少年の絶対の自信が崩れかけた瞬間だった。

教師からも、両親に同意するような旨の注意が投げつけられる。そ

れがさらに少年の心を削つた。

なぜ？　どうして？

何かに鱗が入るような音を感じながら、少年は脳内を疑問符で埋め尽くす。

そして両親からの言葉が、やけにゆっくりと、少年の耳に届いた。

お前が悪い。

この時、少年の心は完全に壊れた。

それと同時に理解した。

自分が人を殺したという事実を。

信じていた両親から否定された。自分のせいで人を死なせた。

失敗や挫折を知らなかつた少年にとって、その事実はあまりにも重く、容易く押しつぶされる。成功だけを歩み続けた少年は、人生で初の、あまりにも大きすぎる挫折に直面した。

それから彼の両親や担任は、彼に努力の大切さを説いていたが、彼は果然としたまま動かない。既に壊れた心に、外からの言葉など届くはずが無かつたのだ。

散らばつた破片を一つ一つ拾いながら、少年は全く機能しない頭で考える。

自分が悪いのか。

自分が今まで得てきた勝利は悪いものだつたのか。
では自分は何をするべきなのか。

……いや、何もするべきではないのか。

組み直された破片は、元よりもさらに歪に仕上がった。中身の無い、空虚なガラス細工。

それ以来、”何でも出来た少年”は、その少年によつて殺され、彼の中から完全に消え去つた。

残つたのは”何も出来ない少年”……否、”何もしない少年”だつた。

他人の勝利を奪わないように、もう誰も傷つけないように、もう自分が傷つかないように、

少年は自己の意志を殺し、常に手を抜き、自分の外との関わりを避けた。何かをするのが怖くなつたからだ。

また自分に目を向けることもしなくなつた。何かをするだけで、そこにはいるだけで他人を傷つける害悪。そんな自分がひどく汚らわしく思えたからだ。

少年はいつしか、何も見なくなつた。その双眸は淀み、どこまでも黒く沈んだ。

次第に少年は枯れしていく。何もしなくなつた生物が死へ向かうのは自然の摂理。ただ動くだけの肉塊。それは生きているとは言い難い。この頃には既に、自分の内と外の両面への認識がかなり希薄になつていた。

朝のニュース番組も、学校での授業も、出会つた人間の顔や名前も、その全てが少年の空っぽな心を通り過ぎていく。

他人と触れ合う時は、別の人間を幻想し、己を覆い隠した。

今話しているのは自分ではない。別の誰かだ。自分が関われば傷つてしまつ。だからその人間になりきれ。自分はすでに死んだのだ

から。

他人に関わることに臆病になつた彼は、そうすることでしか他人との関わりを保てなかつた。それが、自分と外、そして内。この3つの乖離を加速させていたのだが、彼は気付かない。

しかしそんな少年の心にも、辛うじて引っかかるものがあった。それはゲームやアニメといったものだ。内側にも外側にも向けられることの無かつた少年の視線はそれらに注がれた。

アニメやゲームなら、傷つけることも傷つけられることも無い。何かを奪う事も無い。

少年はそれらに触れる時間だけが至福だつた。他人もいない、自分もいない、己に仇なす物は何一つとして無かつたその世界は、少年にはひどく眩しく、それでいて暖かく映つた。

しかし、かつて死んだ”何でも出来た少年”は、そんな少年が嫌いだつた。

§

「じゅうじゅう！ キスしてあげる 愛してあげる

けたたましく鳴り響くケータイのアラームを止める。そのまま半身を起し、ベッドから足を下ろす。立ち上がり、部屋の外へ出た。

廊下を歩き、階段を下つる。

「あー、もう起きたの？ おはよー、優

「おはよー」

挨拶をされた。応答した。「この人は……そう、八神優の母親だ。

自分は誰だ？

俺は山田幸助だ。

自分をこの世界に確立させるためのハリボテ。自分は俺の意志でこの世界に転生した。

では俺は誰だ？

私は八神優だ。

借り物のこの姿に与えられた役割はこの人の娘、そして俺の入れ物。俺が今演じるべきキャラクター。

今日はクラス委員の仕事があるからこつもよつ早く起きてこい。

「朝ごはん、もう少しで出来るからちょっと待つてくれ？」

私の母 ハ神楓ヤガミ カエデが、包丁片手に笑みを浮かべる……って、この表現だけだとかなり恐いな。

「うん。あー、私お父さん起こしてくるね」

そう言つて、私はいつもと同じ手順でいつもと同じ笑顔を作る。

よし、今日も大丈夫だ。

人気の少ない廊下。

隣を歩く男子生徒が、私の腕に支えられているプリントの束に目を向ける。

「なあユウ、やっぱそっちも俺が持つよ」

そいつ言ひづ彼の腕にも既にプリントの束が抱えられている。

「ううん大丈夫。ありがとね、織斑くん」

やんわりと断る私。このやり取りはこれで4度目である。いい加減
ウザいぞ織斑一夏。

今は朝。それも、他の生徒がまだ登校して来ていないような時間帯だ。

普段の喧騒に溢れたものとはまた違った姿の校舎に、まるで世界に2人しかいないような錯覚を覚える。

ちなみに今何をしているのかといふと、今日のSHR時に配布するプリントを教室まで運んでいる。ただ、そのプリントの量がはつきり言つて異常だった。

2人で分割してもまだ両手で抱えなければならないのだ。これを異常と呼ばばず何と呼ぶ。

「あー、そうだ」

突如、一夏は何かを思い出したように呟いた。そしてすぐに、やや俯きがちに逡巡するような素振りを見せる。

「どうかしたの？」

訊ねながら、私は下から見上げるように彼の顔を覗き込む。私の顔が突然近くに現れたからか、一夏は「うおわっ！」などと奇声を上げながら仰け反った。心なしか顔が若干赤くなっていた気がしたが、今はそんな事を気にしている場合ではない。何故なら、

バサアツ！

「あつ……」

「うわ……」

先程の衝撃で、一夏の手にあつた紙束が広範囲に渡つて床を白く塗りつぶしたのだから。

さらに偶然、2人の生徒が通りかかった。彼らは話に夢中で床の惨状に気付いていない。

「でさー、昨日もレイカちゃんからメールが来てさー

「だからそれサクラだつて

2人は会話しながら紙の上を通り……

クシャ、ズルッ

「じゅつ！」

「いややあハルスアツー！？」

「いや絶対さくおぱんつー！？」

鈍い音と共に白き大地と邂逅を果たし、奇声を上げてその慶びを表現する2人の男子生徒。

要するに紙を踏んで滑って転んだのだ。

「 「」

私達はどちらも言葉を発さず、田の前の現実から逃れる術を摸索していた。

「拾ひの手筋」

「すまん、ハウ」

結局コイツがあの時に何を言おうとしていたのか聞くことが出来ないまま、この静かで短かった時間は過ぎて行った。

6（後書き）

まだ原作本編には追いつきません。
そして伏線の設置も終わりません。
そもそも大した伏線がありません。
種明かしなんてまだまだ先です。

そんなことよりサッカーしようぜ！

7（前書き）

お前も早く得物を出しな。
どちらが捕食者なのか、その身に直接教えてやるつ。
あ、やらないか

阿部高和

「朝から立て続けで悪いんだけど、放課後に資料の整理を手伝ってくれる？」

「はい。分かりました」

その日の放課後

カビと埃の臭いが鼻をつく。

陽光は遮られ、薄暗さが輪郭を曖昧にし、より一層不気味さを増している。

「あつ、この資料はそこにしまつてくれ

「うん。分かつた」

手渡された資料を指定された場所へ持っていく。

というわけで、今私達がいるのは資料室。私達といつのは、私と一夏という意味だ。

朝から続き、またもや雑用という名の……うん。雑用は雑用か。とにかく雑用を押し付けられていいのだ。クラス委員といつのも大変である。特に彼に関してはバイトを休んでまで手伝ってくれている。優しすぎるといつのも難点だという事を改めて知った。

私は作業を続けながら考える。
暇だ。退屈だ。暇すぎて死ぬ。……あ、そうだ。

たまには女子らしく恋愛話をするのもいいかもしれない。

「ねえ織斑くん」

「なんだ?」

互いに作業の手を休めることなく会話を続ける。

「織斑くんっ! とか、好きな人とかいないの?」

「うーん、よく聞かれるけどいいないな

静かな部屋に、2人分の声と、プラスチックのファイルとプリント用紙が擦れる音だけが響く。

「ホントに? 織斑くんっ! 結構モテるでしょ?」

「いやいや、そうでもないぜ? 僕なんて全然だよ

ついでだ。お前のその鈍さも多少は矯正してやるわ。そうすれば鈴も少しさり易くなるだろ?」

ちなみに鈴は未だに私の事をライバル認定している。しかし彼女と

接するにつれて、私の中での彼女の高感度は急上昇していた。
ええ子やで、あの子は。

「いやいや、そう思つてるのは織斑くんだけだよ

「ん？ どういう事だ？」

「ほら、織斑くんってカッコイイし優しいし、気も利くし家事も出来るし、それでモテないつていう方がおかしいよ。気が付いてないだけで、織斑くんの事が好きな人は案外身近にいるんじゃない？」

「えつ……？」

ふと見てみると、彼は作業の手を止め、こちらを凝視していた。
暗がりで分かりづらいが、顔も赤くなっている……ような気がする。

そういうえば一夏がここまでストレートに褒められた事つて無いんじやね？

あらあら、うつかりうつかり。うふふ。

その後、物凄く気まずくなつたのは言つまでも無い。

「織斑くん、これは上方じゃない？」

資料は基本的にファイリングされており、そのファイルの背表紙には番号と簡易的な名前が書いてある。

棚を見ていると、一つだけ前後の数字と合わないものがあつたのだ。

私はそのファイルを手に取り、一夏に手渡した。自分でやるのが面倒だったからだ。何か文句でも？

「ホントだな。ちょっと待つてくれ」

受け取った彼は肯き、奥の方へと移動する。ややあって戻って来た彼が持っていたのは、少し大きめの脚立だつた。

彼は私の田の前でその脚立を使い、棚の上部へ資料を戻す為に腕を高く伸ばし、踵を軽く浮かせた。

さて、ここで二つ確認しておこう。

まず一つ目、

「下の方を支えてくれるか？」

「オウヨー！」

といつお決まりの流れがスルーされたこと。

次に、彼は今腕を高く伸ばしており、その手には分厚いファイルを持っています。しかもつま先立ち。何が言いたいのかといふと、かなり不安定な体勢であること。

さうじ、今は部屋が暗いので周囲の確認が困難であること。

最後に、私の田の前でそれらが展開されているといふこと。

「痛つー！」

上方から金属と人体がぶつかる鈍い音と、朝から何度も聞いている声が耳を貫く。

直後、脚立とその上の人間の身体が左右に揺れる。

重みの無い金属音、次いで紙がめくれる音。同時に迫り来るクラスメイトと数冊の分厚いファイル。

うわ、マジk

s i d e · — 夏

「いつてえ～……」

頭上に陣取るファイルをどかし、立ち上がりつつ床に手を着いた……はずなのだが、

(何だこの床……柔らかい……)

そう、柔らかいのだ。しかも弾力がある。そしてちょうどいい感じの大きさ。軽くひと揉みしてみると……うむ。柔らかい。

マシユマロ？ 綿？ もち？ いや、どれも違う。

一体何なのかなと、暗い手元をよく見てみると、それは制服の胸部だった。

ははは。なんだ胸かー。そつか胸かー。ははは。

「…ン…？」

突如として突きつけられた田の前の現実に、声にならない声を上げる。

それは歓喜の声か、はたまたマンガなどでありがちなパターンを予期しての悲鳴か。どちらかは定かではない。

ゆつくりと視線をスライドさせる。するとやこには……

「えーっと、そろそろどこでもいらっしゃってもいいかな？」

我がクラスメイトにして同じクラス委員のコウ様が非常にお困りになつていらっしゃつたのだ。

「うわあっ！ すすすすまん！ つて違うんだコウー… これはその何というかだな…」

勢によく立ちあがり、しどりもどりになりながら弁解にならない弁解を繰り返す俺に、「あはは……。大丈夫、気にしないから」と、余裕の笑顔で応対するコウ。

気になつて……。それはそれでどうなんだ。いや、暴れられるよりはマシだけど。っていうか鈴なら絶対に暴れてるだろうなあ。

俺は脳裏に浮かんだ、幼馴染が酢豚片手に暴れまわるという奇特すぎる光景を焼き消し、改めて謝罪の言葉を告げた。

「その……悪かった」

「だから別にいいって」

ユウはそう言つが、なかなかその顔を直視出来ない。正直かなり気まずい。いや、俺が一方的にそう思つてるだけなんだけどな。

俺のそんな雰囲気を察したのか、ユウも何と言葉を掛けるべきか考えあぐねいでいるようだ。

数秒後、この空氣の中、口火を切つたのはユウだった。

「そういうえば織斑くん、今朝何か言いかけてたよね？　あの時なんて言おうとしてたの？」

……よりによつて今それをチョイスしますかユウさんよ。

恐らく彼女が言つているのは、俺が紙を床にばら撒く直前の事だと思つ。

俺としては今この言つのはかなり憚られたが、それよりもこの空氣を何とかしたいという欲求が勝つてしまつたのだろう。

気が付くと、自然と言葉が零れ落ちていた。

「いや、大したことじやないんだけどさ、ユウつて俺のこと避けてないか？」

「……えつ？」

声のした方を見てみると、そこには、ぽかんといつ擬音が出そつた程ぽかんとしたユウがいた。

「『めん、避けてるつて言つと語弊があるな。なんていうか』『う、他人行儀つていうか、一線を引いてるつて言つたが、とにかくそんな

感じがするんだよな

すぐ近くにいる彼女は黙つたまま俺の言葉に耳を傾けていた。

校門を抜けた先、校舎のすぐ前、彼女と初めて会つた時から感じていた違和感。

彼女の言葉や態度は、それまで接してきたどの人間とも違っていた。警戒とも呼べるかもしれない。距離を縮めれば縮める程、彼女は遠ざかろうと抵抗している。しかし同時に、そこに留まろうとしているようにも感じた。チグハグというか何というか。俺にはそれが不思議でならなくて、気が付くと目で追つっていた。

見れば見る程、知れば知る程、近づけば近づく程、彼女の立つ場所は、どの他人よりも遠かつた。

その警戒とそれに対する抵抗のせめぎ合いが、俺に対しては一層顕著だつたように思える。まあ所詮は思えるつてレベルだけだ。

それに、と俺は続け、先程口にした推測に至つた最大の理由を放つた。

「ユウひてさ、鈴の事は下の名前で呼ぶくせに、俺や弾の事は苗字で読んでるだろ？」

「……は？」

ユウは再びぽかんとしていた。心なしか、驚きよりも呆れの方が大きいように感じた。

ややあって、今度は吹き出し、クスクスと笑い始めた。呆れたり笑つたり、忙しいヤツだな。

「なんで笑うんだよ」

「いや、なんて言ひか、やつぱり織斑くんは織斑くんだなって」

「ほらそれだそれ！なんか他人臭くてしつくりこないんだよなあ」

「」

すると彼女はまたしてもあの顔を見せた。離ようどしながら畠まるうとする。見せたといつても本当に一瞬だ。それも氣のせいと言われば納得してしまひ程に些細な変化。

気が付くと、ユウはいつものユウだった。柔らかく微笑み、その桜色の唇を踊らせる。

「じゃあこれでどう？　一夏くん？」

この時、何故か俺の目は彼女に奪われ、その場から動くことが出来なかつた。恐らくユウから見た俺の姿は、さぞだらしなかつただろう。

いつの間にか氣まずかつた雰囲気はどうとかへと消え去り、その後滯り無く作業は終了した。

ちなみに今日家に帰ると偶然千冬姉が帰ってきていたので、今日あつた事をそれとなく話すと（当然脚立から倒れた件は伏せた）、

「私の弟がこんなに鋭いわけがない。お前は誰だ？」

などと書いて本気で戦々恐々していたのでむしろ口うがビビった。

さうに翌日、ユウが弾を下の名前で呼び、その事情を俺に訊ねた弾
が千冬姉と同じような事を言っていた。

「俺の一夏がそんなに鋭いわけがない！ 誰だお前！」

「俺はお前のじゃない」

side out

一夏が基本的に人の心の機微には鋭いという設定を失念していたことにより、私が軽い失態を晒した場句に名前で呼び合うような関係になってしまった事件から月日は流れ、今の季節は冬。

この頃には何とか鈴の誤解を解くことが出来た。ここまで至るのに、

「じめん。実はあたし、小学校の時に既にプロポーズしてるのフハ
アじゃないわよね」

「大丈夫、私は別に一夏くんのことは何とも思つてないから

といった経緯があつたのだが、まあここで語つてしまつたし十分だ
らう。

と、そんな事よりも今はもっと重要なことがある。というか目の前に
に転がつている。

それは

「……チケット？」

「うそ、嘘！」

父が見れば発狂しそうな程きれいな笑顔で肯定する我が母。

「あーやああつー まふすいいいいつー 母さんの笑顔が眩しそぎ
るうううー 可愛いよ母さああんー 田がああつ田がアアアアア
ツーー」

陸に打ち上げられた魚の如くのたうちまわり、既に発狂している父。

「モンド・グロッソって知ってるわよね？」

母に訊ねられ、記憶を探る。……はて、何だつたか。
普段からもつとテレビを見ておけばよかつた。後で調べておくか。

「実はそれのチケットが手に入ったから、みんなで見に行こうと思
つて」

「ふうん、それってこいつなの？」

「来年に入つてからだつたかしら」

結局この後、第一回モンド・グロッソの事をすっかり忘れたまま、
その日はベッドにもぐつこんだ。

「悔しいーでも感じちゃうー ビクンビクンー。」

お父さん……ビクンビクンって口で言わなくて……。

7（後書き）

突っ込まれるだらうなあ……と思つていたら以外にも指摘されなかつた点。

・弾と一夏が出会つのは中学に入つてからでは？（Wikι参照）

・数馬きゅんはどうした（。。。）ゴルア！！

・”ヤ”ガミ（ ）と”オ”リムリ（ ）の座席が……隣？

ちなみに用意していた返答

- ・一夏及び主人公との関係の形成が面倒といつ理由だけで一夏と出会つタイミングを中学入学以前にしてしまった五反田弾氏には非常に申し訳ない事をしたと思っており、ここに深く謝罪申し上げます。
- ・御手洗数馬氏については出さない予定です。だってどんな人物か分かんないんだもの。

カズマ繋がりで星空へ架かる橋の一馬で良ければ出しますけど。

- ・入学してすぐの座席は自由といつ設定です。ちなみに座席の位置関係はこんな感じ

窓 優 夏
窓 弾 鈴

鈴が一番に座り、その前方に一夏が陣取り、弾が何となしに鈴の隣

に腰をおろし、「今この流れで最も自然に座ることのできる席がどうのこうの」と、モタモタしていた我らが主人公である優さんが最後に残っていたその位置になつたのです。

……多少無理があるのは承知の上です。

とつあえず前話で言いたかったのは、一夏は優のことをよく見てますよといつ事です。

そんなことより皆聞いてくれ！ 実は面白い……いや、やっぱ面白くないけどとにかく思つた事があるんだ！

- ・一夏が鈍感なのってモツプさんのせいじゃね？

幼少期からの付き合いでの頃から篠に好意を向けられていた。しかし昔から素直になれなかつた篠ちゃんは気持ちとは逆に一夏にキツく当たつてしまつ。そんな態度は明らかに好意から来るものではないと判断した一夏。しかも一夏は人の心の機微には鋭いという設定がある。つまり、篠が何かしらの感情を抱いているのは察することが出来たと。しかし行動から読み取れるそれは明らかに自分に對して良い物ではない。

つまり、そのせいでお意=恋愛感情と言つ風に繋がらなくなつてもおかしくない。だから好意を向けられる程度では、相手が自分に對して恋愛感情を抱いているとは直結しない。

- ・実は鈍感なのは一夏じゃなくてヒロインなんじゃね？

常識的に考えて、付き合つ=買物になどと直結するはずが無いし、プロポーズ紛いの事をされて単純に奢つてもらえると解釈するはずが無い。挙句の果てにキスまでされて、これで好意に気が付かないはずがない。

つまり一夏はヒロイン達の好意に気付いてる。ではあのスルースキルは何なのか。

簡単だ。無言の拒絶である。彼は優しいから、直接拒絶すればみんなが傷ついてしまうのではないかと思い、告白そのものを無かつた事にしているのだ。

ヒロイン達は、自分がとっくに振られている事に気付かず、一夏への思いを抱き続けている。

一夏はお姉ちゃん一筋なんだよ。

つていうかモンド・グロッソってビの季節に何処で行われたんでしょうね。

イタリア語だし、イタリアですかね。

いやでもドイツ軍が独自の情報網を敷けるよつな場所ですから、ドイツかもしませんね。

「ヤガミコウ? それがお前の探してたってヤツか?」

淡い橙色を基調とした、温かみのある色合いの部屋。どこかのホテルの一室のような場所で、ソファーに腰を下ろしている美女が粗野な口調で訊ねた。

訊ねられたのは、中学生程度と思わしき白髪の少年。彼はどこか煩わしそうにしながらも、視線を美女の方へと向けた。

「ああ、そうだ」

少年はそれだけ答えると、壁に寄りかかり、手に持っていた文庫本のページを開いた。頭を傾けると、さらさらと白い髪が垂れる。少年は気にも留めずに、視線をページの上で走らせる。女性は再び彼に訊ねた。

「でも会った事も無いんだろ?」

「会った事は無くても分かるんだよ。見てくれが変わらうとも、この世界にいる限りはな。まあ、向こうは俺の存在を認めようとしないと思つけど」

女性は溜め息をつき、少年に見せ付けるかのようにドヤんなりした。

「なんだそりや。そんなヤツにわざわざお前が直々にモンド・グロッソの招待券を手配したのか? まさかソイツもお前みたいに”HISをコアから作れる”ってわけじゃないよな?」

女性はソファーから身を乗り出し、少年に険しい顔を向ける。しかし少年はあっさりと首を横に振る。その表情には僅かな苛立ちが浮かんでいた。あまり、その人物の話をするのが好きではないらしい。

「いや、アイツは俺とは違う。違うって言うか、同じだけど違うって言うか、とにかくアイツはEISの製作に携わっていない。それどころか専用機すら無い。少なくとも現段階ではな」

ただ、と少年は再び少し苛立ち気味に続ける。

「製作に関して canon-tで言えば前者だな。俺に出来てアイツに出来ない道理はない。それに、生身での単純な戦闘ステータスなら俺とほぼ同等の筈だ。生まれ育った環境と、男と女という身体的な差があるから辛うじて俺に軍配が上がるってレベル。だから少なくともお前なんかが敵う相手じゃない。肝に銘じておけよ、オータム」

少年が女性に向けた眼は猛禽類を思わせる程に、強く鋭かつた。

「アイツは俺が、真正面からぶつかって完膚なきまでに叩きつぶす

§

一年生に進級したある日

朝、食卓をいつものように囲んでいると、母が唐突に切り出した。

「そういえば来週じゃなかつた？」

来週？ 何のことだ？

記憶を探るが、一向に答えが出る気配は無い。まあ、人間の脳はどうでもいい記憶を排除するように出来ているのだから、恐らくどうでもいいことなのだろう。

「ああ、そういえば来週だな」

父も箸を進めながら聞く。え？ 何？ 知らないの私だけ？

「やつぱり今回のモンド・グロッソもブリュンヒルデは織斑千冬さんかしい」

母の言葉に、父は肯定の意を示す。

「前回はす」かつたからなあ。彼女なら一連霸も夢じやないだろ？

(ふーん。そんなにすこい人がいるのか)

連霸といつくらいだから、恐らく大会か何かの話だろう。

(まあ、来週になれば分かるわ)

私はそう結論付け、みそ汁の入ったお椀を口元へ運び、盛大に噴き出した。

鼻と口から薄茶色の液体を垂れ流し、涙目で咳をする私。

そしてさり気無くテーブルの上の料理を避難させていける両親。

お前ら、10代の娘が晒した惨状に対するフォローと気遣いは無いのか。そんなんだからウザイとかって言われるんだ。私は言わないけど。

「もひ、ゴウつたら慌て過ぎよ」

「そうだぞ。母さんの作った料理が天上天下並ぶ物が無い程の至高の品であることは認めるが、食事は良く噛んでゆっくり食べないと」

「うぜえ。ちげえよクソが。」

「けほつ、けほつ、え、えつと、モンド・グロッソつてもしかして、IJSの世界大会？」

父と母はきょとんとした顔になつたかと思つと、すぐにその表情を怪訝なものへと変化させる。

「ユウ、あなた大丈夫なの？」

「逆に聞くけど、それ以外に何があるんだ？」

大 伸一だる。

「えつ？ ゴウも観戦に行くのか？」

隣に座る黒髪の少年 織斑一夏が、次の授業で使う教科書を鞄から引き張り出しながら驚いたような声を上げる。

「”も”つて」とせ、もしかして一夏くんも行くの？」

私は返答の内容は分かつていたが、とりあえず聞き返した。
ブリュンヒルデの名は公式で発表されているので、別に知っている
ところ体で返しても良かつたが、『あいえす～？ なにそれ～？
興味ない』的なスタンスで居た方が、今後自然な流れで本編から
離れていくとふんだのだ。当然そのままIS学園を受
験せず、普通の高校に通いながら裏でISをボツコボしていく
ことになるだろ？

「ああ、千冬姉が出るんだよ」

「千冬さんか！？ そうなのーー？」

さも、今初めて知りましたとでも言ひつかのよつにレジオーバーにリ
アクションする。

「やうなの、つて……コウ、アンタ本つ前に流行とか世間の流れに
疎いわね」

呆ながら斜め後ろから口を挟んできたのは、最近私の中での高感
度が上昇している茶髪ツインテールチャイニーズ、凰鈴音だ。

「千冬さんといえば第一回モンド・グロッソでの総合優勝者じゃな
い」

「へえ～、千冬さんってす～いんだね～」

ちなみに私は千冬とは一度だけ面識がある。面識と言つても、弾、鈴の2人と共に一夏の家に行つた時に、ちよつと家を出ようとしたら千冬と偶然会つただけという話だ。

「わうだ！ 良かつたら明日は一緒に行かないか？」

一夏からの提案に一瞬思考を巡らせるが、別に構わないと判断し、承諾した。

「なあ、次つて移動教室だろ？ 早く行こうぜ」

赤毛の男子生徒 五反田弾に促され、席を立つ。

私はこの時失念していた。先程の様な軽い判断は、得てして後悔の種になるのだという事を。

といつわけで、時は流れ一週間後

次の章に行く前に言つておくッ！ 私は今、やつのスタンダードをほんのちょっとぴりだが体験した。

い…いや…体験したというよりは、まったく理解を超えていたのだ

が……

あ…あつのまま、今起ひつた事を話すぜー

「私は一夏と共に会場へ移動していたと思つたら、突如として一夏
が攫われた」

な…何を言つてゐるのかわからねーと思うが、私も何をされたのか、
わからなかつた…

頭がどうにかなりそつだつた…催眠術とか超スピードとか、そ
んなチヤチなもんじやあ断じてねえ

もつと恐ろしいものの片鱗を味わつたぜ…

8（後書き）

早く主人公にチート能力使わせたい。

9 (前書き)

愚鈍な大衆は変化を嫌うのね

はなこちゃん

その光景はまさしく”異様”と形容するに相応しかつた。

地面に横たわる、夜空と比して尚黒い髪を持つ少女の胸に、穢れを知らぬ雪の如く白い髪を持つ少年の腕が突き刺さつてゐる。これを異様と呼ばばずして何と呼ぼうか。

少女は自身の胸から生える白い腕を、虚ろな瞳で他人事のように眺めていた。

肉が擦れる音と共に、真紅に染まつた腕が引き抜かれる。赤く滴るソレを氣にも留めずに、少年は横たわる少女に背を向けて歩き出した。

「オータム、そろそろ織斑千冬のお出ましだ。ずらかるぞ」

ふわりとした髪の女性 オータムは、少年に対し露骨に不機嫌さを撒き散らす。

「チツ、仕方ねえ。だがエイト、撤退るのはいいが、お前に一つ聞きたい事がある」

エイトと呼ばれた白髪の少年もまた、煩わしさを露骨に浮かべる。

「何だ？」

「なんでソイツにエイトを『えたんだ?』

対する少年は、ふん、と鼻を鳴らし、胸の傷が塞がり始めている少

女に視線を向ける。

「別に。ただソイツが予想外に脆かつたからな。そのスッカスカな入れ物を少しでも他の物で埋め合わせてやろうと思つたんだよ」

それに、と少年は続ける。

「ソイツには俺と同じステージに立つて貰う。立てないなら無理やり引きずり上げる。そういうこと意味が無い。言つただろ？　俺の目的は『そこにある女を真正面から呪き潰す事』だつて」

オータムは理解できないとも言つたげに、黙つたままエスを展開する。

彼女の専用機 第一世代型のエス、アラクネだ。

「ちゅうと待て」

ここで彼女に制止を掛ける者が居た。

件の白髪の少年である。

「なんだよ、エイト

「俺も運んでくれ。ほら、俺がさつきまで使つてたのはアイツにあげちゃつたし」

「知るか。つて止めろー。汚え手で触んじゃねえー。」

「知らないのかオータム。最近は手を赤く染めるのがトレンドなんだぞ？」

「そんな血生臭い流行なんぞ知りたくないねえよー。」

§

「…………え？」

私は呆然と呟く。否、あまりの早業に、そうすることしか出来なかつたのだ。

つい数分前、もうすぐ千冬の試合が始まるのだということを一夏が嬉しそうに語り、私もとりあえず、楽しみにしている的な感じを醸し出していた。

この時、両親は一足先に会場へと向かい、私は一夏と2人で歩いていた。

だが、それは突然現れた。

すぐ近くに黒塗りの車が止まつたかと思うと、運転手ともう1人を車に残し、黒服の男女が数名現れ、隣にいた一夏をひょいと左右から持ち上げ、車へ放りこみ、エンジン音と共に車は去つていった。

この間僅か10秒程。神速と表現しても遜色ない彼らの仕事ぶりに、思わず放心する私。

そして先程の呟きに至る。

さて、これからどうするべきか。

私は今後の展開を思い出そうと、頼りない記憶を探る。

……確かに、今回の誘拐事件は最終的に千冬姉に助けられるんじゃなかつたか？

それが原因で千冬はドイツに行き、ラウラが千冬に惚れて、一夏の夫になる、と。

うん。大体こんな感じだったはず。

ならば私がハ神優として取るべき行動は決まっている。

私は携帯電話を取り出した。友人が攫われた場合の行動としては至極自然なものだろう

「……あっ、もしもし！？ 実は今誘拐事件が 」

決して助けに行くなどという愚行は犯さない。だって行つたら千冬さんにいろいろとバレるじゃん？

そもそも私が行かずとも一夏は助かる運命にある。故に、私が行く必要はどこにもない。

それどころか、私が関わることが原因で一夏に死なれては困る。逆に私が関わっていないところで死ぬのなら大いに結構だけだ。

ただ、私は内心で一夏を軽く見捨てながら、胸中に言ひようの無い何かを感じていた。いや、何かはハッキリしている。どす黒い、嫌悪の感情だ。

その感情は、先程一夏が攫われた時に最後まで車にいた白髪の少年。彼を見てからずつと胸に居座っていた。

見た瞬間に分かつた。コイツとは相容れないのだと。

視界に入るだけで、ただそこにいると分かるだけで吐き気がする。

それだけではない。何故か、その少年に引っ張られているような気がするのだ。いや、どちらかと言つて、『惹き合ひ』といった方が適切かもしない。

そしてその少年に対する嫌悪感が、少年を消せと、己を後押しする。だが同時に、近づきたくない、触れたくない、視たくないとも思う。要はその存在を認めたくないのだ。

さらに、この感情はハ神優のものではないという事が、余計に私……いや、俺の関心を惹いていた。

ハ神優のものではない物など、この身には殆ど存在しない。あるとすれば、転生直前に作ったキャラクター（俺）が抱いた軽すぎる目的と、人の身には余る能力だけだ。

ならば一体この感情はどうから来ているのか。

信じ難いが、可能性として最も高いのは、本来の自分が抱いたものではないかということ。

”本来の自分”などと、まるで他人事のように分析しているが、俺

にはこの表現が最もしつくづくるのだから仕方が無い。

気が付くと、足が動いていた。無論、私の意志ではないし、俺の意思でもない。いや、そもそもそこに意志などという物があるのかも怪しい。

ただ見えない何かに惹かれ、導かれるままに進み続けた。

辿り着いたのは廃工場だった。

特に人影は見当らないが、ここに先程の白い糞野郎が居る。何故かそう確信していた。

工場に向かって一歩踏み出した、その時

「待ちやがれ、 そここのガキ」

その声は工場の屋根の上からだつた。

視線を上へと向けると、そこにいたのは、背部にある8つの脚が蜘蛛を彷彿とさせる見知らぬHS。

近くでHSの世界大会を開催しているところに、こんなHSでHS操縦者が何をしているのか。

そこは廃工場に近づいただけで呼びとめられた所を見ると、ビックやらこの先に近付けたくない何かがあるらしい。

タイミングや状況から考えて、恐らく先程の一夏誘拐事件と関係しているのだろう。だとするとここに一夏が居るのだろうか？ 今思えば、一夏が監禁されていた場所も廃工場だった気がする。

と、HSまで考えて、次に今見上げているHSについて考察する。

あんなHSあつたっけ？

9（後書き）

「私の彼女いらない歴は53万です」

「みんなー！コイツに出会いを分けてくれえー！」

10 (前書き)

"都合主義って知ってるか？

黒髪シンシンの彼

風が吹き抜けた。役目を終えた工場は、今ここに新たな役割を与えたようとしていた。

その役割の名は戦場。

屋根の上からあからさまな敵意を私に向ける1人の女性。その女性が纏うのは、背部にある8本の脚が特徴的なEIS。その脚は爪の様に鋭利で、黄と黒というミツバチのような配色をしている。ぶーんぶんしゃかぶ

私の信頼度〇の記憶が正しければ、あの様なEISはアニメには登場していなかった筈。もしやアレこそが、私が介入したことによって変動した展開、イレギュラーなのだろうか。

もしそうならば、今回の一夏の誘拐は私のせいということになる。なんてこつたい。

「てめえ、こんな所に1人で何の用だ？」

静寂に包まれたこの場所では、余計に耳に響く彼女の声。その声色には隠しきれない殺意が滲んでいる。

うーん、何の用つて言われても『気付いたらここにいましたてへべろ』なんて言つたら殺されそうだな。しかしそれが最も適切なのも事実だ。

でもまあ、きっとあの白髪野郎に惹き付けられて来たんだろうから、一応人探しっこことになるのか？

「人探し……ですか？」

「私が知るか！ 要はあのガキを助けに来たんだろ？」

いや違う。

「だつたら始末する。もし違つても変わらねえけどなあ！」

I Sを纏つふわりとした髪の女性は、その手にマシンガンを構築。間を置かずに引き金を引く。

火薬が弾ける様な音。それと共に吐き出される鉛の塊。大氣を唸らせながら迫るソレが、私の身体を

「ツ！」

貫こうとした所で、手元から甲高い金属音が響く。見ると、私の両手には白と黒の双剣が握られており、右腕を斜めに振り抜く形で制止していた。

それは殆ど反射だった。

本来ならば、私の身体は弾丸に打ち抜かれ、地に伏していたに違いない。

今こうして立つていられるのは、偏に私……ではなく、彼の英傑達が培ってきた勘と技術のおかげだろう。

「てめえ、それは……！」

驚愕と共に、あの女性の視線はたった今投影した双剣 千将莫邪に注がれている。

遅れて、自身の両目に違和感を覚える。恐らく能力の使用によって変色しているのだろう。何故虹彩の色が変わるのが私にも分からぬ。拒絶反応か何かか？

そんな私の疑問などどうでもいいことでも言つよつて、女性は向やら文句の様な独り言をシャウトする。

「Hイトの野郎と同じ……………そつか、てめえがヤガ!!……。チツ、敵わないってのはそういうことかよ！ ふざけやがつて！」

うるせえ近所迷惑だらうが。……あつ、他に人はいないのか。

「私がてめえに勝てねえだと！？ そんなの認められるか！？」

女性は跳躍し、空中で腰部装甲から2本のカタールを抜く。そして背部の8本の脚。その先端が割れるように開き、内部から現れた全銃口がこちらへと向ぐ。

私はそれを見つめながら考える。

アレが私のせいどころかいるのであれば、早々に退場していただこう。そして私の知る流れに戻す。

ついでだ。あのIISには”俺”的ターゲット第1号になつてもらおう。記念すべき事だぞ、誇れ。それにどうせアニメには居なかつたイレギュラーだし、ここで消えても何ら問題は無いはずだ。むしろ

消すことが俺の使命だろ？ きっとやうだそうに違いない。

s i d e : オータム

アラクネの背部 8つの銃口から、ヤツの命を刈り取る鉛が打ち出される。

だがこれで仕留められるとは思わない。私は両手に握るカタールの感触を確かめるように握りしめた。

直後、鋼と鉛が激突する。アラクネから放たれた銃弾を、瞬時に展開した剣群が防いだのだ。

「クソッ！ やつぱりか！」

やはり、アレは私が見知った男と同じ能力だった。

私はその事に対する疑問と、黙っていたあの男に対する怒りとを押し殺し、落下を利用してカタールを振り下ろす。

しかしその先にヤツは居なかつた。カタールはコンクリートを砕き、その空振りは私に僅かな隙を作る。視界の端でヤツの口角が釣り上がるのが見えた。

しまつ
！

「王の財宝」
ゲート・オブ・バビロン

ヤツの背後の空間が揺らぎ、そこから数多もの武具が放たれる。煌びやかな物から無骨な物まで、宝物から名剣まで、ありとあらゆる物が射出される。かつて一度手にした、王の宝物庫。

一瞬目を奪われるが、背部の脚全てを活用して武具の嵐をかいぐぐり、その際に3本程の脚を犠牲にしながらなんとか射程圏外まで移動する。

が、それも束の間。直後には既に、黒く浸食された石斧を片手に持つヤツの姿が眼前に迫っていた。

「クソッ！」

悪態を吐きながら咄嗟に手元のカタールで応戦する。

いや、しようとした。

大気を切り裂く轟音と共に振られたソレは、私のカタールを軽く吹き飛ばした。それだけに留まらず、その振るつた衝撃だけで私の両手は折れ、I.Sの装甲には亀裂が入る。

「ああっ、ぐあっ！」

腕に走る激痛に呻く間も無く、腹部にヤツの蹴りが炸裂する。ボールの様に軽く飛ばされ、工場の壁に大きな亀裂を入れてよじや

く停止した私に、またもや追い打ちをかけんとヤツが迫る。

「ぐりえー。 なんちやつて九頭竜閃… もとい、ナインライ

」

ヤツの必殺の技が届く直前、

「そこまでだ。 八神優」

私の目に映つたのは、どこかより飛来した剣群。
それらは粉塵と破壊音を撒き散らしながら、私とヤツを隔てるよう
に突き刺さつた。

side out

ああ。整合性をとるのはいいが

別に、じ都合主義展開にしてしまっても構わんのだひつ。

丘髣シンシンの彼

1-1 (前書き)

「吾輩の辞書に不可能と言つた文字は無い」

「誤植か？ 不良品なり返品してやる」

「吾輩は辞書を持たない。故に不可能と言つた文字は無い」

「じゃあ可能も無いわけだ」

「可哀想になあ」

「誰だ？」

「やう睨むなよ。オレはまあ、いわゆる神ひいやつだ」

「神？」

「そりやへ。ひつとも、オレはどじちかっていと邪神の類だけどな」

「その邪神サマが何の用だ」

「だから睨むなって。別に大した用じやねえよ。非して同一なる道を歩みながら、片や神の恩恵に与り、片や氣付かれずに輪廻の輪に組み込まれることも無く、永劫に彷徨い続けることになる。そんな後者であるお前さんを救つてやろうつと思つてな」

「救つ……だと? 僕を? 邪神であるお前が?」

「邪神だつて同情くらうするわ。それで、何を望む? お前さんはあと最低でも72年間は生きて貰う。具体的には、記憶と意識を持つたまま転生してもうづんだが、その上で特典を付けてやろうつてわけよ」

「特典? 記憶の引き継ぎだけでも十分じゃないのか?」

「いや、それがな、どうもお前さんの片割れがその特典とやらを押し付けられたらしい。だからお前さんにもやらないとフェアじゃないだろ?」

「そうか、アイツも……分かつた。じゃあアイツが望んだものを教えてくれ」

「確かに、”ふぇいと”とかいうのに出でてくる力。それから、転生先是”あいえす”とかっていう世界らしい」

「ではソイツと同じものを頼む」

「まるっきり同じでいいのか? 今ちょっと調べたんだけどよ、その世界のモビースーツ的なのって女にしか使えねえんだろ? しかも能力の方はもつとヤバいだろ。転生してもお前さんは人間だ。その人間が英雄の力を使えばタダじやあ済まねえぞ?」

「それでも構わん」

「……ふーん、そうか。まあ、お前さんがそう言うなら仕方が無い。その辺に関してはオレが勝手に調整しておいてやる」

「おい、余計な事をするな」

「人……じゃなかつた。神の厚意は素直に受け取つとけ。誰かに気に入られるつてのも1つの才能さ。だつたら、それはお前さん自身の力に他ならない。オレはお前が気に入つた。その迷いの無い意思の是非は知らんが、その先を見てみたくなつたんだよ」

「……ふん」

「さあ、行つて来い。山田幸助」

「どうでもいいが、なぜPUMAのジャージをきた」

§

俺は目の前に突き刺さる大量の剣を放った人物に視線を投げかける。まず視界に入つたのは、雪のようないし白い髪。次いで、空とも海ともにつかない深い青の眼。

俺は自分と離れた位置に立つこの男に対し、出所不明の嫌悪感とともに、大きな疑問と驚愕の念を抱いていた。

1つ目に、アイツは八神優という名を知っていた。

俺は転生後、特に何事も無く平穏に過ごしていたはずだ。こんな強敵オーラをビンビン放つような男に知られるようなことはしてない。

ストーカーか何かか？ 気持ち悪い。

2つ目に、先程飛来した剣群。これらには法外な量の魔力が込められていた。

いや、量など問題ではない。この世界に存在しない筈の魔力。それ

をヤツは扱う事が出来るのだ。

しかも、先程の剣は、どれ1つとして本物ではなかつた。全ては贋作、すなわち投影魔術。

何故魔術が使えるのかは分からぬ。しかし、ヤツもまた俺によつて引き起しそれたイレギュラーなのだろうといふことは想像に難くない。

「エイト！ てめえどうして黙つてやがつたんだ！」

ISを装備した女性が叫ぶ。なるほど、あの糞野郎はエイトといふのか。

エイトと呼ばれた少年は、先程自身が投影した刀剣達を消し、女性に向き直つた。

「八神優の能力の話か？ そもそも俺の言いつけを破つて手を出したのはお前だ、オータム。俺に当たるのはおかしいんじやないか？ ISを展開していなければ、お前は間違いなく死んでいただろう。そんな大きな実力差すら測れないお前が悪い。まあ、強いて質問に答えるとすれば、言つたところでお前は自分の目で見るまで信じなかつただろうからな」

言つかるや否や、オータムと呼ばれた女性から視線を外し、今度はこぢりにその青い眼を向ける。

よし、コイツのあだ名はブルーアイズ ワイトドリゴンにしてよ。むしろ社長の嫁か？ いやむしろ社長でいいか。

「それにしても、俺がちょっとドイツ軍とお喋りをしている間に随分と暴れたみたいだな。悪いが組織としては、お前を見過ごすわけにはいかない。と言つても、オータムは既に戦闘不能だ。ISを壊

されても困るしな。よつて、ソレから俺が相手にならう

言い訳がましく、次々と建前を並べ立てる社長。しかしそう言ひつ社長の表情には、全く別の思惑が如実に表れていた。

俺の観察眼が正しければ、恐らくヤツは組織などではなく、単純に己のために俺と闘いたがっている。

理由は定かではないが、俺が社長に感じている嫌悪感や惹き合ひの感覚とも関係があるのだろうか。

まあ、そんな事は今は置いておけ。

重要なのは、ヤツは俺のせいでの発生したイレギュラーであり、今後ストーリーに影響を及ぼしかねないということ。そりに言えば、下手をすればこの男に他のキャラまで殺されかねない。何せ魔術なんて物を使う得体の知れない男だからな。もしそうなれば、そいつらが死んだのは俺のせいという事になる。それだけは避けなければならぬ。

昔とは違つたから。かつての山田幸助は死んだのだから。決して同じ結果を出してはならない。

とまあ結局のところ、俺……いや、本来の山田幸助は、どうやらあの男の存在を容認できないうらしく。

ならば、もはや鬭わない理由は無い。

「奇遇だな。ソレからしても、お前の様な異端を放置するわけにはいかない。聞きたい」とほこくつかあるが、消えて貰おう

言い終えるや否や、俺は弾丸の如く飛び出し、先程オータムに向ける筈だった石斧を振るう。ちなみにこの石斧は、ヘラクレスが使つ

た物をランスロットの能力で宝具化している。

敵は魔術を使うのだ。ならば、詠唱の間も無い程に攻め尽くす！

大気を押しのけ、横に一閃。その一閃は当たれば碎き、躲せば切り裂く二重の一太刀。

しかしエイトは、俺の手の中の物と全く同じ物をその手に出現さる。

直後、無骨な岩同士が激突する。その剣戟は雷鳴や地響きにも似た轟音を撒き散らし、相殺しきれず、行き場を無くしたエネルギーが暴風となる。

俺はその腕に確かな反動を感じながら、ひどく釈然としない思いを抱く。

俺には見えていたのだ。いや、分かっていた。

ヤツが俺の一振りを受け止めようと動く前に、既に俺はこの攻撃が止められることが分かつていた。

俺は思考を切り替え、次いで上段から振り下ろす。ヤツの存在を否定すべく、迅く、強く振り下ろす。しかしこれもまた止められる。また止められると分かつていた。

おかしい、何かがおかしい。

俺は一度体勢を立て直すべく、後方へ跳躍する。しかしこれを機に思つたのか、あの男はここぞとばかりに距離を詰めてきた。ヤツは反撃に転じようと、高速で石斧を振るった。

先程の俺と同じ横薙ぎ。ヤツの剣筋は手に取るように分かつた。俺

は石斧を使つていなし、ヤツに直接拳を叩きこむとするが、今度はこちらの拳の軌道が分かつていいかのようにあつたり避けられる。

……一体何が起きている？

互いに互いの手の内が分かるという奇妙な状況に、俺は底しれぬ不安感を抱いていた。

このまま実力が拮抗したままだと、長期戦になつた時、先に戦闘を始めたいた俺が不利だ。

それに、実力が拮抗していること自体がおかしい。こちらが振るうのは英雄の力。神話の再現。並の人間が太刀打ちできるはずが無いのだ。

にもかかわらず、俺と同じ物を投影し、あまつさえ互角に打ち合つてみせると、いつ薪割をやつしてのけたこの男は一体……。

そうは思いながらも、攻撃の手は休めない。敵が振るえばこちらが受け、こちらが振るえば相手が受ける。しかし互いに決定打は与えられない。

相手も同じ状況の筈なのに、目の前の男は特に動搖した素振りはなかつた。まるで初めから分かつていいかのようだ。

ところで、彼は落胆した調子で告げた。

「ふう、じつやら買い被り過ぎていたようだ」

その直後、突如としてヤツのスピードが上昇した。

「はつ、くつ……！」

思わず声が漏れる。先程とは打つて変わり、今は明らかにヤツの優

勢。俺は剣戟のすさまじさに押され、防戦を強いられる。

「のままでは……負ける……っ！」

俺は一か八か賭けに出た。この展開が読まれていれば失敗。読まれていなければ勝てる。

ヤツの連撃を防御しつつ、背後に王の財宝を展開する。選り好みなどしている暇は無い。俺は蔵の中の宝物を片つ端から射出した。

エイトはやや目を見開いたが、すぐに冷静に対処する。しかし、そこに一瞬の隙が出来る。

今度こそ 決める！

「射殺す百頭！」
ナインライブズ

ギリシャの大英雄ヘラクレスが完成させた流派『射殺す百頭』のうちの一つ。対人用ハイスピード9連撃。

しかし俺がこの時抱いたのは勝利の確信ではなく、不安が首を擡げる感触。

それを証明するかのように、俺が目にしたのは、アイアスを展開しながら俺と同じ構えを取るヤツの姿だった。

そして激突。

一際強い衝撃が腕に伝わる。だがどうせ傷付くのは八神優の身体だ。ならば関係無い。動け。振るえ。ただヤツを消す為に。

しかし、どうやら武器の方はそうはいかなかつたようだ。中央に大

きな鱗が入り、幻想の維持が不可能になる。

「へんツー」

俺はすぐに新たな武器を手に取り出すとするが、対する田の前の男は、攻撃の手を止めていた。まるでこれ以上は不要だとでも言つてゐる。

そして、ヤツは投影した石斧を消し、淡々と言葉を紡いだ。

「軽い、軽すぎる。お前自身はあまりにも空虚だ。借り物の身体に、借り物の思考に、借り物の技能。お前はどうせ全てそう思つているんだろう。何一つとして自身の物ではないと。だからそんなに弱いんだよ、お前は」「

……」「いつは何を言つてこる?

「借り物? 空虚? 何の話だ?」

何故こいつは知つている?

「では聞くが、お前はそもそも何故ここにいる? いや、お前がこの世界にいる意義とは何だ? 何故この世界にいる?」

理由？ 意義？ それは……

「お前が今語りたとした事は、本当にお前の物なのか？」

「…………」

俺の物？ いや、違う。俺が今語りたとした物は”俺”とこいつキャラクターが持った目的。本当の俺の目的など存在しない。

「お前は何故俺と鬭つた？」

なぜ？

「それは……お前が一夏や、他の人達に危害を……」

「それも、本当にお前が抱いた理由か？」

「どういう事だ？ そもそも、コイツの言つ”お前”とは俺の事を言つているのか？ いや、違うだろう。コイツはどういわけか、”本来の山田幸助”を知つてこいる。

「確かにそういう理由もあつたんだろう。だが、本当にそれが一番の理由なのか？ 俺が魔術を使つたから、俺がお前の知らないイレギュラーだから警戒したか？ たつたそれだけで、俺があのガキを殺すと結論付けたのか？」

「お前、どいままで……」

「なんでも知つていい。何なら教えてやる。お前は俺に言つてよいの無い嫌悪感の様なものを持った筈だ」

ああそうだ。俺はお前が許せない。お前の存在が許せない。だが、何故だ？ わからない。知りたくもない。

「でもその感情の出所がわからない。そうだろう？ だがそれこそが、お前が今闘っていた最大の理由だ」

「なぜそういう言い切れる？」

いや、分かっている。ヤツの言う事は正しい。

「お前も分かっているんだろ？」「…」

ああ、分かっている。

「つまりお前は、お前自身の目的ではなく、他人が作り上げた目的を借り、八神優という入れ物を借り、他人の持つ能力も借りりて、この世界で今やっていたことといえば、理由も分からぬ鬱憤晴らし。そこにお前と言ふ者はいない、行動に中身が伴わない。これを空虚と呼ばずになんと呼べと？」

ああ、そうだな。

「それから、いい加減にしろよ。俺が今話しかけているのはお前が作ったキャラクターじゃない。お前自身だ。作り物はすつこんでろ」

突如、八神優……いや、山田幸助の雰囲気が豹変した。と同時に、虚ろに淀んだ瞳が俺を捉える。

「ふん、やつとお出ましか」

しかしヤツは俺の言葉に応える気配は無い。代わりにあるのは、明確な敵意。

次の瞬間、俺達は双剣を手に、再び切り結んでいた。

だが

「やはり、軽い。諦めろ、お前では俺に勝つことは出来ない」

ヤツを突き動かしているのは、理由も分からぬふわふわした嫌悪感だけだ。

これならば、まだ先程のキャラクターの方がマシだ。

俺はヤツの手に持つ双剣を上空へと蹴りあげ、俺自身は後方へ移動し、距離を取る。

これ以上は本当に無駄だ。あんな中身の無い相手を倒したところで意味など無い。早々に切り上げるか。

「今日の手土産にいいものを見せてやるわ」

俺はポケットに入った小さい十字架を握りしめ、呼びかける。
そして光と共に展開されるエンド。

黒を基調として、所々に白いラインが細く入っており、手足や胴体部分など、全体的に装甲が細く、どこか冷たい印象を与える。

「完成したばかりで今初めて動かす機体だったが、上手く行つたか

俺はIHがきちんと展開されている事を確認すると、そのまま瞬時加速を行い、ヤツへと肉薄する。

当然向こうは迎撃を行つてくる。ヤツの手には蹴り飛ばした双剣と同じ物が握られている。

俺は剣を振るう腕を強引に掴み、多少ダメージを受けながら地面へ叩きつけた。

コンクリートが砕けるが、それでもなおヤツは反撃を諦めていかつた。その手に持つ双剣を俺の顔めがけて投げつけるが、その程度の悪あがきが俺に当たる筈も無い。

俺は地面に横たわるヤツの胸に、IHの装甲を纏つたまま腕を突き刺した。

当然胸からは紅の血が溢れてくる。だがそんなことはどうでもいい。俺は心臓を探り当て、強く握り、動きを止める。

「さて、お前にプレゼントだ」

俺はそのまま、IHを解除した。

11(後書き)

我ながら意味が分からぬ。深夜テンションつて怖いなー。
らい（あれ？3日？）寝てないなー。といふで腹減つたな
◦ 2日ぐ

D A S O K U ソ 読まなくたっていいんだよ～（前書き）

【F a t eでI S】 10万PV突破記念ドラマ

「我が生涯は悔いばかり」

ベテラン子役、おいなりかずきが演じる主人公と、多彩なキャラクターが織りなすドタバタギャグコメディ！

～あらすじ～

喉を焦がす熱。瞳を焦がす赤。両親だつたモノを焦がす焰。朦朧とする意識の中、少年の心は静かに死んでゆく。

とある民家に火が放たれた。放つたのは父親。その家族は一家心中を図つたのだ。

しかし奇跡的に、1人の少年が救助された。少年の名はケンシロウ。ケンシロウは親戚が営む店 食事処『北斗』に引き取られる。

しかしケンシロウは誰にも心を開くことは無かつた。

ただ部屋の隅で何もせずに1日を過ごします。笑う事も無く、食事もとらない。

本来ならば、この身はもう死んでいる。ここにいる事が間違いないのだ、と。

しかしそんなケンシロウも、見た目は強面だが心も厳しいラオウや、病弱で頭が良いという、話が進むにつれて腹黒キャラが定着しそうなトキなど、『北斗』での様々な出会いを通して、少しづつ心を開

いていく。

これは、全てを奪われ立ち止った少年が、もつ一度前へと踏み出す
勇気のドタバタギャグコメディである。

尚、Jの企画は自動的に消滅する。

そんなJとゆり恋チョコがアニメ化する件について

DA SO KU ソ 読まなくたっていいんだよ？

キャラ紹介

名前：エイト

性別：男

年齢：一夏、主人公より7・8才程年下（転生したのが主人公の後なので、その分年の差が開いた）しかし肉体年齢は同程度。

容姿：

肩まであるサラサラな白い髪に、ややつり氣味の青い眼。肌は白く、作者の不手際により描写はされていないが、白いコートを季節を問わず着用している。

身長は一夏と同じくらい。身体は鍛えられているのか、無駄な筋肉や脂肪が一切ない。

主人公とは違い、能力使用による身体への影響は無い。

性格：

紛う方なき天才。才能が服を着て歩いているような存在。誰かが出来た事ならば、その結果を凌駕して同じ事をやってのける。

負けず嫌い……というより、他人に負ける可能性を考慮せず、自分の勝利を信じて疑わない。

自分が天才である事を自覚しているため、他人に対してもどこか見下した態度になるが、本人に全く自覚は無い。

割と面倒くさがりで、特に頭の悪い（と彼が勝手に思っている）相

手に対しても何かを説明するのが嫌い。

主人公の事が嫌いだが、唯一自分と渡り合える（に違いない）と（
勝手に）一目置いている。

そんな主人公を倒すのが彼の目的。と言つてもただ倒すのではなく、
自分の納得する勝利を求め、真正面から対等な立場での尋常な勝負
を以つて倒そうとしている。

周囲から見ると、その目的の真意は到底理解できず、天才であるが
故にプライドが高く、わがままだからだろうと勝手に思われている。
目的がはつきりしている分、主人公よりも主人公らしい。

好き：読書、静かな場所

嫌い：主人公、煩い場所、頭の悪い人間

能力：

主人公と同じ。但し、マイナス要因は省かれている。

慢心スキル、単独行動スキルは常時発動。生来のものなので取り
外しは不可。

その他：

非合法なIS研究の生き残り。

ISの技術開示後すぐに『男でもISを扱えるようになろうぜイエ
ーイ！』という思想のもとに始まった研究。IS適合ランクの高い
人間の遺伝子をベースに、男として生まれるように受精卵の遺伝子
を操作するという頭の悪い研究だったが、幾多の失敗を経て何故か
成功してしまう。

というのも、実は実験過程でその胎児は死亡したのだが、そこに宿
つっていたのがエイトであつたため、十二の試練によつて蘇り、結果
としては成功という形となつた。

この胎児が8番目の中間実験体であったことから、エイトと名付けられる。

生まれてからは長い間カプセルの中で過ごしたり、研究のためだと強引に肉体の成長を促進させられたりといろいろあつたが、数年後に研究データを狙つた亡国企業に襲撃され、研究所は壊滅。発表前にデータが根こそぎ無くなつたので、計画も凍結。そして唯一の成果であるエイトは亡国企業に着いて行つたので、最終的には「研究なんて無かつたんや！」という状態に。

この世界の知識や技術を手に入れた彼は、ヒミツの魔術を使ってエスのコアを解析。そして同じ物を作つた。

本人いわく「そのシノノノノノノノノに出来て俺に出来ない道理は無い」とのこと。

しかし他人に製造方法を説明しても理解されなかつたため、結局亡国企業の中でコアを作れるのはエイトだけであつた。

ちなみに主人公との関係は、生前切り捨てられ、乖離した人格。本来、主人公の人格だつたもの。要するに元々は同じ人間。言わば後天的な二重人格。

それぞれが独立した精神として存在したために、身体を共有しただけの別の人間として神の書類に登録された。

そして設定を明かしていくたびに作者の頭の悪さが晒け出されると。

番外編、カラオケの話。蛇足。ヤマ無しオチ無し意味無し。
登場する曲がどれだけ分かるかなー、みたいな。

数日前

「割引券?」

昼休み。私の隣の席に座る黒髪の男子生徒 織斑一夏の視線は、
別の男子生徒 五反田弾の手元に注がれている。
彼の手元には、でかでかと「50%オフ!!!」と書かれた紙切れ。
一夏の言葉に、弾は肯定を示しながらドヤつとする。

「せ、何を隠そカラオケの割引券だ」

言われて、彼の手元を覗き込む。たしかに、そこに記載されていた
のは駅前にあるカラオケボックスの店名だった。

「ふーん、なんで割引券なんて持つてんの?」

ツインテールの女子生徒 凰鈴音が、割とどうでも良さげに頬杖

を突く。

「ああ、実は前に道を歩いてたら、武器屋の店員を自称する変なやつに会つてな。ソイツに貰つたんだよ」

自称武器屋の店員だと？ 意味が分からん。っていつか知らない人から物を貰つちゃいけないってばつちやが言つてたぞ。

「とこつわけで、今週末に4人で行こうぜ」

さあ、やつてまいりました。終末です。間違えました。週末です。

そろそろと割り当てられた部屋に入る私達。

壁のスイッチを操作し、エアコンと証明を点ける。

テレビの画面から流れる音楽情報を無視して、各自グラスを手に、ソファーへと向かう。

私がまず座ると、その隣に一夏が座つた。……いや、まあいいけど。室内のソファーの配置は、3人掛けが2つ、L字型にならんでいる。結果、バランス的にもう一つのソファーに鈴と弾がそれぞれ座ることになった。

さすがにこんな些細なことで機嫌を悪くする鈴様ではないだろ？ そう信じたい。

私はタッチパネル式のリモコンをテーブルの上に乗せた。

「それで、誰から歌うの？」

私の言葉に反応したのは、以外でも何でも無く弾だつた。

「じゃあ俺からいくわ。採点はどうする？ 全観するか？」

せっかくだし、その方がいいだろう。

私達3人は書き、弾は画面を操作した。

「」から彼らが歌う曲は、作者が好きな曲の中でも比較的古い曲です。アナタは何曲分かりますか？ 念のため、歌詞そのままの引用は控えます。

かくして、弾が入れた曲が流れだした。歌手名は……影山ヒノブか。ちなみにこれは口ではなく四角だ。

「レッシィゴー！ レッシィゴー！ レッシィンドゴー！

いーまーじょーうねつーがー あーらーしーにーなあつてえー こ
おーすーをーはーしーりーはーじーめるー

ちえーつかあーはあー ゆーずーれーなーいー GET THE
WORLD!」

……いや、まあ何というか、20代ホイホイというか、コイツよく
こんな曲知ってるな。中学生だろ？ つていつかGET THE
WORLDの発音がやたらと良いな。

「へえー、結構上手いな、弾」

そのすぐ後、得点が表示された。

『87点』ナカナカダナ

うーん、他のも聞いてみないことには何とも言えないな。とりあえず
「」の機種の採点のハードルを確かめなければ。

「じゃあ、次はあたしね」

お前らのスルースキルが羨ましいよ。つていつかアレか。ツッコン
じゃいけない空氣か。

気が付くと、テレビの画面には次の曲が表示されていた。先程の宣
言通り、恐らく鈴が歌うのだろう。

歌手は……奥 雅美？ もうきから何だかアツいチョイスだな。

「かめんーの一しーたーに カーーーした しんじいつ を知る一
ゆーうせ」

アクセルウゥウ！ アクセルじゅあねえかああ！ だからなぜ知つ

て いる 中 学 生 !

「なにモーリー わーくーは無ーいーから すべーでーをーあーげよつ
いだーきーあーう ときこー」

鈴が歌い終わり、マイクを置く。

「鈴ちゃんも上手だつたね、一夏くん」

—ああ、そうだな

そしてさりげなくフォローを入れる私。感謝してくれてもいいんだぜ？ 鈴さんよお。

見ると、鈴が少し恥ずかしそうに、けれどもまんざらでも無さげに俯いている。

そして得点が表示される。

『86点』ナカナカダナ

よっしゃ俺の勝ちい！」

「くつ、ま、まだ始まつたばかりよ！」

隣でじやれる2人を放置し、私は静かに考えていた。

2人ともそれなりに上手だった。しかしこの点数。どうやらこの機種で90点の壁を越えるのはかなり難しいらしい。

「じゃあ次は俺がいくよ

そつまつマイクを取る一夏。

「イツは何を歌うんだ……。

私の不安をよそに、次の曲が表示される。歌手名は……富崎歩？デジモンか？

「ユーベリーもおーのゆーめーをー だあーきいーしめえーたー
いー

とおまえらぬうー セーかーいをーかけーめぐれえー

そっかあー！ これはさすがに中学生は知らねえだろ！ いやでも割とメジャーだからな。もしかしたら知ってるのかも。

「たーどーりーつうーくとおきーへえー ゆうめをーのーせーてー
きーぼーうの一風をー

今このーでにかあーんじてる いおーのちかーらをしいーんじる
だけー

う、上手い……！ 何だこいつは、連邦のモビースーシじゃないのに化け物か！？

得点が表示される。

「 「 「 おおー 」 」

「こいつ、やりやがった！　あの90点の壁を軽々と越えやがった！

そして流れ的に次は私の番なわけだ。普通漫画だと、上手い人間の後に主人公の順番が来て、うわーマジかよ　みたいな展開になるんだろう。だがしかし、私を甘く見て貰つては困る。

リモコンのタッチ画面を操作し、歌手で検索をかける。

検索する歌手は J a n n e D a r c。

今までの流れ的に、この画面でジャンヌといえば『M y s t e r i o u s』や『アビウス』だろう。

だが、しかし、but!　敢えて流れには乗らないぜ！

スキル、単独行動を発動！　このターン、協調性が5下がる！

私はこの時テンションが上がっていたのだろう。あとから思えば、ハ神優らしからぬ選択をしていた。完全に流れに合わせるべき…とは思わないが、ここまで外れた選択はさすがにやりすぎたとしか言えなかつた。

そしてイントロが流れ始める。よし、行こうか。

「あなただけだとーいま一誓え　罪を感じてーざーんげをーしろ

蹴られてもていーいづーするな　泣いて許しをー請ーえー

そして言い訳をしろー次は　いつものよつーあーまえてーみて

それが出来ないのならーいーで　今死んでみせ　て　くーれー

しん…と静まりかえる。得点は?

『95点』 マジカヨ

よつしやあああ！ 最高得点キタアアアア！

満足感に浸りながら、ふと3人の顔を見てみると、なんどいつか、引きつっていた。

そんな中、一夏が声を絞り出す。

「コウツて、意外とロックなんだな……」

うん？ 確かにロックバンドは好きだけだ？

そしてなんやかんやでもう一巡

「ガガガッ！ ガガガガーオガイガー！ ガガガッ！ ガガガガガ
オガイガー！」 弾

「夢はいまー とおーいみーさきーにー ずつとーしーずかーにー
たーたーずーんでーいるー」 鈴

「回れっメリーポーラウンド めぐるめくフューチャー 負けー
ないぐーらーいしーんーじてー」 一夏

「ドンストップキッスミー 離れられない ドンストップキッスミー
ー でも許せない

AH AH AH AH 中山由紀江「さあと待ちえりー。」
「

「ひて、こいつはまだ休日の幕は下つたのである。

§

なじられながらの作品の整理

「ねえ君さ、あの1~3部、なんなの?」

「何……と申しますと?」

「いや、だからさ、前回のあの話。あれ意味が分かんないんだけど

「いや、やの……せー」

「はいじゃなくてさ、結局なにが言いたかったのか良く分かんないんだよね。ぶっちゃけあの戦闘シーン要らなかつたよね？」

「まあ、はい」

「しかもさ、もうここにきて主人公の事が良くわからなくなつたんだけど。つまりどういう事なの？ 山田幸助って何人いるの？」

「えつと、2人です」

「じゃあキャラとかなんとかって？」

「まず身体を持っている山田は2人で、そのうちの1人が作ったキャラクターが1つ。それからそのキャラクターがさらに作り上げたキャラクターが1つです」

「つまり4人いるってこと？」

「いや、そうじゃなくて、基本的にオリキャラは2人だけです。元々は1人だったので、2人に分裂した分、元となつた方は一部が欠け落ちるわけです。それが中身の無い山田幸助で、そいつはそれを補うため、そして過去のトラウマから他人と接する時はキャラクターを作つてそれを演じるんです。つまり、山田幸助は2人です」

「結局良く分かんないんだけど。主人公って何なの？」

「空っぽの宝箱があつて、それを守るために壁が二重に設置されています。そしてそれぞれの壁の色は全く違います。例えるならこんな感じです」

「余計分かんないわ」

「すいません」

「じゃあ何で主人公ってHISの世界に来たの?」

「生身でチートを使ってHISを倒せたらすげーくね? といつ浅はかな考えのもと、この世界を選びました」

「なんでそんなに投げやりな設定なの? 主公の心理状態はやたら複雑なのに」

「いや、逆にこの主人公が確固たる目的を持って行動する方が違和感があるって言つか……」

「いやいや、おかしい。それはおかしい。じゃあ何? 他の世界でも良かつたってこと?」

「いや、逆にどうしてもHISじゃないとヤダなんていう主人公なんていふんですか?」

「そういう話じゃないでしょ?」

「はい、すいません」

「あとで、Hイトだつけ?」

「はい」

「ちょっと意味が分かんないんだけど」

「……と申しますと？」

「まさか、なんでそんなに”対等”に拘るの？」

「えっと、搦め手というか、そういう策を弄したり弱点を突いて、勝つべくして勝つよりも、真正面から対等にぶつかるっていう、両者ともに同じ状況で勝つた方が、相手にとっても自分にとってもその勝利はより一層映える物だし、それに同じ条件下の方が『どちらか一方が勝つて』っていう証明をより強めますからね」

「ふーん、そう。なんかイマイチ分かんないけど、次にさ、結局エイトは勝つてんじやん」

「でも、彼の場合はI.Uを持っている、そのための厳しい訓練を積んでいる、能力にマイナス効果が無い、相手を自分と同一人物だと認めている。などなど、アドバンテージが沢山あるわけで、こんな状況で勝つても意味が無いと。しかも最後のなんか、相手の太刀筋が手に取るように分かるつていうのもココから来ていて、主人公が勝てなかつたのは、単純に鍛錬不足と、相手が自分と同一人物だと認めなかつたせいで、本来なら読める太刀筋も、100%の推測は無理だつたからなのです」

「ふーん、あつそ。つてかソイツが、なんかもう存在自体が後付けだよね」

「ギクウウウツ！」

「それとも何？　まさか初めから『んなややこしい設定だつたわけ？』

「いえ。本来なら主人公は、病的なまでにやる気の無い少年といつ
設定でした。それがどうしてこんな……」

やばい、眠すぎて頭が回らなくなってきた。
何か書いてたら他にもボロボロ出でちゃうだ。

DA SO KU ソ 読まなくたっていいんだよ～（後書き）

（ソレは……どうだ？）

男 ストレイト・クーガーが目を覚ますと、そこにあつたのは見知らぬ天井、そして見知らぬ顔。

（俺はもう死んだはずじゃないのか……？）

「さあ、キミは今日から私達の息子だ。名前は、そうだな……ストレイト、ストレイト・クーガーなんてどうだろ？」

（まさしく俺の名前だ！）

「まあ、素敵な名前だこと」

微笑んだのは女性だった。見れば、自分はこの女性に抱かれている。（なるほど、俺は転生したのか。つまりこれは第一の生。くしくも前世と同じ名前ときた）

両親に気付かれないように、ソリ床を分解してみる。

（よし、アルター能力は使えるらしいな）

前世でのクーガーは、能力の強化の代償に、身体がだいぶ劣化していた。しかし今はそれが無い。つまり、万全の状態で、今までよりも速く走れるということ！

(やつてやわいじやねえか)

今宵、みんなの兄貴ストレイト・クーガーが、誰よりもスピードイーに、スマートに、ストレンジにヒルの世界を駆け抜ける！

「ヒルてのはその程度か？ そんなスピードじゃ俺には勝てないぜ？ イチヤ！」

「一夏だ！」

かみんぐすーん。きっと上記の様な小説は探しはあると思います。自分は見た事はありませんが。読みたい方は探してみましょう。

それともやっぱり兄貴じゃなくて姉御にして、専用機をラティカル・グッズスピードにするのもいいかも知れない。

いや、むしろ聖杯戦争に最速の兄貴光臨なんてのもありかも知れない。

魔女の騎士で、あああなたセイバー

みんな大好き赤い鍊鉄の英雄なアーチャー

元気で努力家でワン子なランサー

みんな大好き最速の兄貴なライダー

友情出演！ 喧嘩大好きでもつと輝けええ！なバーサーカー

ちんちくりんなステッキ操るピンク色の髪のキャスター

背後に立つたら殺されるーーなアサシン

尚、この企画は自動的に（ｒｙ

「そ、そんな！　量産型のISがこんな……ッ！」

混乱。驚愕。困惑。いや、まだ足りない。

セシリア・オルコットの心境はいかほどにも形容し難いものだった。

”量産型の試験戦闘を手伝つてほしい”

そう頼まれ、快く引き受けた。

量産型のテストくらい、自分に掛かれば大した手間では無い、そつたかを括つて。

しかしセシリアの予想は大きく外れる事となる。

日本の量産機である『打鉄』が相手だと思っていた矢先、現れたのは見たことの無い機体だった。

全体的な色調は淡い青。しかし腕の装甲は肘先までしか無く、まるで腕まくりをしているようにも見える。

そしてつま先は装甲に覆われておらず、さながらサンダルを履いているようだ。

そして眉毛に沿う形で装着された黒いカモメのような物。

それらが織りなす、そこはかとない”おっさん”臭。

全てが未知。本当にISなのかと疑つてしまつ。

しかしい戦闘が始まると、田の前の機体がいかに規格外かを思い知らされた。

一見荒々しい動きだが、かと思つと柔軟かつきめ細やかな機動を見せ付け、何の変哲も無いただの殴打と思いきや、その身に受けた瞬間、セシリアの身体は大きく弾かれる。

セシリアは内心の動搖を隠しながら訊ねる。

「量産型にしては、これとか性能が高すぎるのではないか？」

対する操縦者は、してやつたり、といった表情を浮かべ、

「だから言つたでしょ？　”西さん型”だつて」

とにかく一つ聞きたいのですが、

「いんですか？」
結局のところ、第四世代の展開装甲って何がどうなって何がどうす

とある病院の一室

白を基調とした部屋の中、静かに眠る一人の少女。

その少女の傍らには、さながら武士を思わせる鋭い雰囲気を纏う女性と、医者と思われる男が立っている。

「それで、容態は？」

女性は努めて平静を保つて訊ねた。それに対し、医者は淡々と事實を述べていく。しかし、ある話題に触れた時、医者の表情に影が差した。医者の告げた内容に、女性は驚愕を以つて返す。

「心臓と同化している、だと？」

「はい。信じ難い話ではあります……。少なくとも我々には、今彼女から口を切り離すことはできません。篠ノ之博士ならば分かれませんが……。まあ、幸い命に別条はないようですが、現状はこのままで問題は無いかと思われます」

言われて、女性は自身の友人である天才の顔を思い浮かべる。あの天才は興味があること以外には全く頓着しない。果たしてこの少女に関心を持つのだらうか、と。

「念のため政府には報告しておきました。恐らく彼女の元には、学園への推薦の話が行くことになるでしょう」

医者の言葉に、女性はベッドに横たわる少女へと視線を向ける。

「ハ神優……たしか一夏のクラスメイトだったな」

§

あの事件のせいで、私は今の入院生活を……強いられているんだ！
(集中線)

というわけで、一夏の誘拐事件は無事に解決し、私はぶつちやけ無駄に怪我を負つただけだった。

話を聞くと、一夏の居場所をドイツ軍から聞き付けたブラコンお姉ちゃんが、大会を放り出して助けに来たらしい。
当然その時に私の事も見つけたわけだけど、その時の私の状態が半端じゃなくヤバかったらしい。

まず出血量。服が真っ赤になる程の出血量。これだけでもヤバいの

に、出血なんてもんじゃない。傷がひとりでに塞がっていく。これはマジでヤバかつたらしい。何処のモンスターだよって感じ。病院に付く頃には、血まみれなのに傷一つ付いていない新品同様の状態だったらしい。それについては滅茶苦茶しつこく聞かれた。うん。多分それゴッドハンド。

だが正直な話、事件当時の事はよく覚えていない。口の悪い女に圧勝した辺りまでは覚えてるんだけどな。なので傷について聞かれても、覚えてないの一点張りだった。嘘は言つてない。

で、さらにヤバい事がもう一つ。
どうやら私の中にEISがあるらしい。しかも今のところ摘出は無理らしい。〔冗談だと信じたい。〕

だが〔冗談では無いよつて、わざわざ元ブリュンヒルト直々に〕通達くださった。

生身でEISに勝とうつていう話だつたはずなのに、EISに乗つたら意味無いじゃん。

しかも卒業後はEIS学園に通つてしまひひとつのこと。もう本編から離れられないじゃん。

EIS関連の話を除き、両親に詳細は伝えられていない。特に傷が治つたくだりなんかは話したつて信じて貰えないだろうし。

それから一週間ほど検査入院とやらが続いた。

その間、ほぼ毎日のようにいつもの3人が見舞いに来てくれたのだが、特に一夏の勢には半端じゃなかつた。涙ボロボロ流して、なんかもう葬式みたいな雰囲気で何度も謝つてきた。もう一種のホラーだつたね。

で、なんか一夏がキリッとして決め台詞的なのを言つて、隣で鈴が真っ赤になつてギヤー、ギヤー言つてて、弾はなんか、へえ、一夏も言つ時は言つんだ的な事を言つて、私は普通に聞き流していたので、ああー、うん。みたな事を言つたら、鈴がなんか私にもギヤー、ギヤー言つ出して、なんかもう地獄絵図だつたね。

しばらくして退院。

この頃には私の一夏に対する評価はある程度向上していた。

なんというか、ヤツは普通にいいヤツなのだ。鈍感という、傍から見ている分にはかなりイライラする欠点はあるものの、その他でのスペックはかなり高い。そして何よりも気がきく。

特に事件後は甲斐甲斐しくなつたというか、なんだかいつも一緒に居た気がする。なんでだろうな。キリッとした時に言つていた台詞

をもつとちやんと聞いておけば、もしかしたら分かったのかもしれない。

ちなみにこの時、鈴から物凄く複雑な視線を感じた気がするが、まあ氣のせいだね。

その後は鈴が中国に帰つたり、まあいろいろあつたわけだが、特に何事も無く時は流れ、なんやかんやで三年生に進級。

他の生徒が進路だのなんだのとキヤツキヤウフフするなか、私はそれとなく一夏に進路について訊ねてみた。

「進路？　ああ、それなら藍越学園を受けようと思つてます」

なんでも、学費の安さと就職率の高さに釣られたらしい。

あれ？　でも一夏は何だかんだ言いつつも最終的にEIS学園に来るんだよな？　どうやって来るんだっけ？

……まあ、気にした所で仕方無いか。それに私が介入したことによって展開に変動が起きたのかもしれない。もしかしたら一夏がそもそも入学しないという展開もあるかもしれない。だとしたら本編にもかなり影響が出そうだな。…………一夏のポジションには誰が入るのだろうか。もしかして私？　いやいやナイナイ。

「やつはコウはどうなんだ？」

一夏に訊ねられ、思考を巡らす。

EISで敢えて言わずに、EIS学園の方に意識が行かなくした方がいい

いのか？ しかしそれだと本筋から大きく逸れることは免れない。かといって一夏に話して、もし IIS 学園に来てしまえば、もう本編に関わりたくないなどと言つていられない。しかし一夏が学園に来なかつた場合、下手をすればそのしわ寄せが私に来るかもしない。

いや、そもそも言おうが言つまゝが展開に変わりは無いのかもしない。

「実は IIS 学園から推薦の話が来てて」

もう知らん。どうにでもなれ。本筋に巻き込まれるのも仕方が無い。転生者の定めだ。

時は流れ、冬。

私は試験会場へ向かう弾と一夏を見送るべく、アホみたいな寒さの中、じうして駅までやつて來ていた。

「それじゃあ頑張つてね、二人とも」

冷え切つた顔の筋肉を動かし、私はいつもの笑顔を浮かべる。正確

には、いつもよりきつとふつされた様な笑顔だつただひつ。本編不
介入を諦めたからな。

「ああ、行つてくる」

「まあ、今年は倍率も低めだし、落ちないと思つけどな」

そんなことを言いながら、電車へと乗り込む2人。

私はこの時、2人をちゃんと見送つた。ちゃんと、”藍越学園の入
学試験”に見送つた。

そのはずだった。

電車の姿が見えなくなつた頃、私の脳内に電撃が走る。
そう、思い出したのだ。一夏がいかにしてEHS学園に入学すること
になるのかを。

「……なんで今になつて思ひ出すんだよー。」

もつ少し早ければなんとか……なんとかなつたのだるうか？

12（後書き）

そういうや主人公のエスビーツすつかなー。

北欧神話をモチーフにしよう。つていう漠然とした方向性しか決まってないし。

なぜ北欧神話のかつて？ だつて厨二っぽくてかつこじいじやん。

それとも両さん型にしようかな。間違いなく最強のエジだよね。

13（前書き）

呂輩はエスである。名前はまだ無い。

主人公のエス

原作と同じシーンを一夏視点で書くにあたり、原作とは多少表現などが異なる部分がござります。といふか殆ど違います。

ソレに触れた時、音叉を叩いたような音と共に、俺の中に膨大な情報が流れ込んでくるのを感じた。

数秒前までは知りもしなかつた、そして永遠に知ることは無かつたであろうその情報が、まるで知悉し、慣れ親しんだモノであるかの様に、何一つの違和も無く脳内を駆け巡る。

視覚野に接続されたセンサーが、直接意識に数値化された情報とパラメータを浮かび上がらせる。

そしてそれらの知識・情報が俺に確信させる。

ソレを動かすことが出来るのだと。

そこから見えた景色が俺に与えたのは、僅かな感動と驚愕。そして、守る力を得たという大きな興奮と歡喜だった。

もう守られてばかりじゃない。俺は絶対に誰かを……アイツを守つてみせる。

ふと思い出したのは、私が I.S 学園に入ると話した時に一夏が見せた、まるで捨てられた子犬のような表情だった。何故あんなにも悲痛な表情を浮かべていたのかは知らないし興味もない。しかし、あの時程ヤツに申し訳ないとと思った事も無かつた。

春の匂いに包まれながら、I.S 学園の校門を抜ける。視線を脇に向けると、そこには女子女子女子。女の園と言えば聞こえは良いが、その実はたゞ管に姦しいだけだ。

しかし厳密に言えば、ここは女の園ではない。何故か。理由は簡単だ。ここにはとある1人の男子生徒が入学することとなっている。

女性にしか動かせないという致命的過ぎる欠陥を抱えたパワードスーツ、I.S.

しかしその定説を覆す猛者が現れたのだ。

そう、我らが主人公、織斑一夏である。

「それじゃあSHRはじめますよー」

黒板の前に立つとほほ笑む山田真耶先生。このクラスの副担任だ。

生徒と大差ない身長、大きめの服、ずれた眼鏡、子どもが背伸びします感が否めない彼女にぶら下がる、自己主張の激しい胸がなんとも……って俺は何を考えているんだ。

といつわけで、今日は入学式。そして今はSHR。

新たなる学び舎で、これから先の学園生活へと思いを馳せたいところだが、いかんせん教室内は妙な緊張感に包まれており、それどころではない。

山田先生が何やら話しているが、反応する生徒は1人もいない。といふかほぼ全員俺を見ている。
いや、決して自意識過剰ではなく、当然比喩表現でも無い。

そして何より、クラスメイトが全員女なのだ。本当に勘弁してくれ。

これは予想外にキツイぞ。

座席の場所も真ん中の列の一番前。 もはや注目してくれと言つていいようなものだ。

俺は救いを求め縋りつづくよし、窓際の席へと視線を向けた。

「…………」

篠さーん。 別に顔を背けなくてもいいじゃないですかー。 俺はこいつですょー。 窓の外に俺はいませんよー。

俺の救難信号に気付いていたはずの幼馴染は、あらうことか傍観するつもりは無いらしい。

これが6年ぶりに再会した幼馴染に対する態度か？…………えつ、まさか俺つて嫌われる？

次いで俺は、隣の席へと視線を移す。

そこには、なんだかんだでずっと隣の席で、またしても隣の席に居る俺の中学時代からの友人、そして俺ずっと傍で守ると約束した女の子。ハ神優が

「…………」

虚ろな目でただ前を見つめていた。 だめだこりや。

俺は内心で密かに諦める。

コウは時折こういった完全な無表情になる時がある。それは授業中であったり、式典中であったり、誰かと話す必要の無い時が多い。

この時のユウは「ミニユニケーションがまつたくとれない。前にこの状態のユウに話しかけた事があるのだが、全く会話のキャッチボールが成り立たなかつた。

例えるなら、投げたボールを剛速で地面に叩きつけられたような、そんな感じだ。

まるで、この世の全てがどうでもいい、だから関わるな。そう言われている気がしてならない。

「……くん。織斑一夏くんつ」

「は、はいっ！？」

突然掛けられた声に思考が分断され、現実に引き戻される。ついでに声も裏返る。

そしてクスクスと聞こえる笑い声。本当にキツイ。

「あ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？
怒ってるかな？ ゴメンね、ゴメンね！ でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まつて今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、『』、ゴメンね？ 自己紹介してくれるかな？ だ、ダメかな？」

台詞の途中から、いつの間にか頭を何度も下げていた山田真耶先生。それに伴い、ずれていた眼鏡がさらにずれるが、本人は気付いていないらしい。あつ、落ちそう。

そういうわけで、俺の自己紹介の番が回ってきたわけだが……

(うう……)

突き刺さる視線視線視線視線。28人分の死線が、俺を射殺さんばかりに向けられる。

先程俺のSOSを軽くスルーした雫も、俺へとその鋭い視線を横目に注いでいた。

ユウは……まだぼーっとしている。

ぐつ、男ならこれくらいで立ち止るんじゃない！

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願ひします」

言い終え、頭を下げる。ふつ、我ながら隙の無い完璧な挨拶だ。

そんな俺の感想に反し、教室内には『もつと話せ』というオーラが充満している。

一体どうしろって言うんだ。一発ギャグでもやれってか？ でも俺の持ちネタなんてそんなに多くないんだけどな。しかも評判悪いしひどい。

俺はまたもや雫へと救いを求めるが、またしても視線を合わせてくれない雫。泣くだ。

ユウはさつき確認した。返事が無い。ただの屍の様だ。

しかし』のまま黙つて座ると『暗いヤツ』といづレッテルを貼られそうだ。よし、こぎや……

「以上です」

その後、数名の女子生徒がずつこけ、実はこのクラスの担任だった千冬姉に出席簿による一撃を貰つはめになるのだが、正直痛すぎて上手く語れない。

で、俺の番が終わり、自己紹介は進んでいく。座席はランダムなのが、割といちんな方向から声が上がった。

そしていよいよ俺の隣の席 ユウの順番がやってきた。

が、

「ふむ、これまで敢えて待つてみたが……八神、私が前に立つているにもかかわらず呆けるとは、いい度胸だ」

そう。ユウは未だに魂が抜けていた。そして千冬姉の必滅の一撃が振るわれ

「……なぜ止める

なかつた。いや、振るわれたのだが、それをユウはいとも簡単に受け止めたのだ。それも片手で。

そういうえばコイツ、運動とかかなり得意だったな。

そのまま、コウの瞳に光が灯る。

「…………えつ？　えつ？　あつ、わわつ、すいません！」

千冬姉の眼光にあてられたのか、普段は落ち着いているコウが目を見えて焦っていた。こんなテンパつたコウは初めて見たかもしれない。

side out

「あー……」

授業終了後、隣で一夏が頃垂れていた。

あれ？　たしか一夏つてそれなりに勉強も出来たと思つただけだ。

「どうしたの？」一夏くん

一夏は頃垂れたまま頭を抱えた。

「いや、この雰囲気が何とかならないものかと……」

「ああ、やつちね……」

教室を見回す。するとこちらへ向かっていた視線がふいつ、と逸れる。

それは廊下も同様だつた。今にも壁を押し倒して教室へ流れ込んで来そな程の生徒がひしめき合つてゐる。

ゴキブリみたいだ。

「……ちょっとといいか」

声がした方に顔を向けると、そこに居たのは黒い髪をポニー・テールに纏めた、日本刀の様な雰囲気を纏う女子生徒 篠ノ之箒だつた。

つていうか私より胸でかいな。

そんな思考を見透かしたのか、箒の鋭い視線が私を射抜く。

……はい。黙つてます。

「……箒？」

一夏が顔を上げ、幼馴染との感動の再会を果たす。
うん、良かつたな。

「……廊下でいいか？」

一夏は周囲を見渡し、こくこくと頷く。
そなにこの空気が耐えられないか。

「早くしろ」

「お、おひ。それじゃあコウ、後でな」

彼女が一夏を連れだつて廊下へと歩を進めると、モーゼの如く人波が割れていく。すげー、初めて見た。

それから少しして、篠が先に教室に戻ってきた。もひ話は終わったのだろうか。

その直後、千冬さん（さん付けに昇格）がツカツカと入ってくる。

っ！　まづい、急げ一夏！

案の定、遅れて入ってきた一夏は千冬さんの制裁を受けることとなつた。

13(後書き)

誰か北欧っぽい感じの名前考えてくれないかなー(／＼・＼)チラツ

14（前書き）

なぜ悪い事をするのかって？ ふん、簡単な話さ。それはな、お前が正義だからだよ。

バイキンマン

つてかヤバい。10分前にはあったはずの感想が消えた。間違えて消したかも。寝ぼけてたのかな

廊下を歩く2人の男女。

1人は腰にまで届きそうな長髪をボニー・テールにして纏めている少女。その凛とした雰囲気は一本の真っ直ぐな刀を彷彿とさせる。

もう1人は整った顔をしているが、その他は最低限の清潔感を身だしなみ程度に保っている少年。飄々としており、見るからに唐変木である。

そしてその2人を取り巻くように、一定の距離を保った位置で包囲網を形成している女生徒たちの集団。

彼女らはさながら零れ落ちたエサを貰い受けようと息をひそめるハイエナの如く、必死に聞き耳を立てている。

一般的な日常生活を送っていてはまず見ることの無いこの状況の中、先に口を開いたのは少年だった。

「そういえば

「何だ?」

即座に反応する少女。少女の言葉に促され、少年は言葉を発した。

「去年、剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう」

不意の称賛に頬は朱に染まり、口はへの字に歪む。なんとも判りにくい照れ方である。

対する少年は一瞬不思議そうな表情を浮かべるがすぐに表情を戻し、それから、と続けた。

「久しぶり。六年ぶりだけじ、筹つてすぐ分かつたぞ」

「え……」

「ほり、髪型一緒だし」

少年に指をされ、途端に髪を気にしだす筹と呼ばれた少女。

「よ、よくも覚えているものだな……」

その事実がよほど嬉しいのか、見るからに少女周辺の空気が華やいでいる。

といひが、

「いや、忘れないだろ。幼馴染のことへりい」

突如、少女の雰囲気が一変する。その鋭い視線が少年に向けられるが、少年はまたしても不思議そうにしている。

それから2人の間に沈黙が流れる。少女はチラリと教室を見やり、その沈黙を破った。

「……といひで、その、先程お前の隣に居た女はどうじつう関係だ？」

「え？ ああ、コウの事か？ アイツは中学からずっと」

「いや、チャイムの音が少年の言葉を遮った。

§

「 であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によつて罰せられ 」

目の前でデカイ乳をした小さい先生が講釈を垂れており、教室の隅では黒髪巨乳な先生が武士の様な威圧を放っている。

現在は授業中。概ねの生徒が時折頷きながらノートを取つてゐるのに対し、ノートを広げたまま放心していいる生徒が約2名。

1人は私こと八神優。といつても私の場合、推薦が決まってからはIS関連の知識を片っ端から頭に叩き込んだ（叩き込まれた）ので、そもそもこんな授業は受ける必要が無い。つまり面倒だからノートを書いていないというだけの話である。

正直なところものすごく暇だ。意識をシャットダウンしたいくらい。

しかしそれが出来ないのは、後ろで陣取る某三国志の英雄……もとい、織斑千冬先生が怖いからだ。

いや、今朝はマジで食べられるかと思った。

「八神、くだらん事を考えるな

「す、すいません」

ばれてるし。つていうかこんなのは八神優のキャラじゃない。なんでこんなに鋭いんだよチクショウ。

そして2人目は、私の隣の席に座るこの世界の主人公 織斑一夏である。

彼はどうかと積まれた教科書をチラつとめくつたり、板書をしている女子生徒を物珍しそうに見たりと忙しそうだ。

「な、なに？」

一夏の視線に気付いた女子生徒が、期待と驚きと緊張が入り混じつたような作り笑顔を浮かべる。

ふん、私の方が作り笑いは上手いな。

「あ、いや。なんでもないんだ。ゴメン」

「そ、そつ」

そして残念がりながら安心するという器用な芸当をやってのけ、再

び授業へと復帰する女子生徒。

行き場を無くした一夏の視線が、今度は私へと向けられる。

私のノートを見るや否や、まるで雪山で遭難して助けが来た時の登山家の様な、希望に満ち溢れた表情になる一夏。

その顔が語っていた。仲間を見つけた！ 信じてたぜ、ユウ！ と。ふん、莫迦め。

「織斑くん、何かわからないところがありますか？」

先程の一夏と女子生徒のやりとりが目に入ったのか、山田先生が授業を止めて一夏に訊ねた。

突然の質問に、慌てて教科書に視線を落とす一夏。その整った顔面には溢れんばかりの疑問符が浮かんでいた。

「わからないところがあつたら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

教師らしく振る舞えて嬉しいのか、えへんという効果音が出そな程に胸を張っている。

ふむ、デカイ。邪魔じやないのかな。

一夏は期待に目を輝かせ、天を突く勢いで腕を真っ直ぐに掲げた。

「先生！」

「はい、織斑くん！」

「ほんと全部わかりません」

だろうな。

「え……。ぜ、全部、ですか……？」

しかし山田先生はこの返答が予想外だったのか、マジ困るんですけどオオオ！ といった風に顔を引きつらせていく。

「え、えっと……織斑くん以外で、今の段階でわからないうつていう人はどれくらいいますか？」

山田先生が拳手を促すが、当然どこからも手など上がる筈が無い。そもそもこの学園に来る生徒といつのはすべからく事前学習に取り組んでいるものなのだから、この程度で止まっている方が異常だ。

僅かな望みを捨てずに、本当に手が上がらないのかと周囲を確認する一夏。

ふと、私と田が会つ。その双眸からは裏切りに対する落胆が見て取れた。

(コウ！ 裏切ったのか！)

(いや、そもそも私と一夏くんが同じステージにいるはずが無いでしょ？ 一応推薦でここに来てるんだよ？)

(なん……だと……？)

アイコンタクト終了。

この直後、一夏は例によつて例の如く、いつの間にかここまで來ていた千冬さんの出席簿アタックを受ける羽目になる。

まあどうでもいいよ「八神、お前もだ。白紙のノートとはどうこう見だ、馬鹿者」

言葉が耳に届いた次の瞬間、私は反射的に首を傾けていた。額に目掛けて横薙ぎに振るわれていたソレは、気持ちのいい音を伴い、見事に後の生徒へクリーンヒットする。そして教室を支配する微妙な空氣。

後で謝つておいつ。

地味に長かった授業が終わり、張りつめていた教室の空気が緩んでいく。

休み時間に入つてすぐ、一夏が先程の授業についての解説を求めてきた。

めんどくさ。

しかし断るための都合のいい口実も見当たらないのもまた事実。なんやかんやで、結局教えることに。

「じゃあまでは」のアラスカ条約の項目から

教科書を広げ、一夏に解説しながら考える。なんだか最近の私はおかしい、と。

そもそも中学時代の私はこんなに注意されるタイプのキャラじゃなかつた。

基本的に何でもこなす感じのキャラだったのにどうしていつなつた。最近は本当に気が抜けているというかなんというか。

「例えば国家や企業に属する」のは

もしかして原作に追いついた上に本編不介入を諦めたからか？

今まで自分どんな言動がどう本筋に影響するか分からなかつたし、何とかして本筋から離れようと気を張つていたが、今はそうではない。

もはや逃れる」とは不可能なのだ。どうしようともある程度本編に組

み込まれることは避けられない。故に気を張つたところで仕方が無い。そう考えているところがあるのは否定できない。

「ちょっと、よろしくて？」

「よろしくないです。で、この場合考えられる罰則としては――」

いや、違う。確かにそれもあるだらう。しかし他に大きな要因がある。

私はとある存在を頭に思い浮かべた。元日本代表にしてこのクラスの担任、そして現代を生きるサムライ 織斑千冬だ。

彼女の異常なまでの洞察力と観察力。それがあるから手抜きをしてもらわれるのではないか？

つまり私が今この状況に陥っているのはあのラストサムライのせいに違いない。

「ちよ、ちよっとあなた！――このわたくしに対してその態度とは――体どうこうおつもりですの――？」

「ま、まあまあ。それで、用件は何だ？」

「あなたもその態度は何ですか？――このイギリス代表候補生であるセシリア・オルコットがわざわざ声を掛けて差し上げたというのですから、それ相応の対応があつてしかるべきではなくって――？」

「……ダイヒヨウ」「ウホセイ？」

「代表候補生っていうのはI.I.I操縦者の国家代表を決めるための候

補、有り体に言えばエリートといふ

「

……うん？ そんなワードは教科書に乗つてないぞ？

と、そこで現実に引き戻される私。ふと顔を上げると、目の前には顔を真っ赤にして怒髪天を突くという言葉を体現している金髪ドリルさん。

なんだつけコイツ……セシリアだつけ。

セシリアは『エリート』という単語に少し気を良くしたのか、幾分か怒りが引いて行くのが分かつた。

「そ、わたくしは選ばれたエリートなのですわ！」

そして私達にその白い人差し指を向け、高らかに言葉を紡いだ。

「本来ならわたくしの様な選ばれた人間とは、クラスを共にするだけでもき」

キーンゴーン……

突如として鳴り響く鐘の音。それはセシリアの言葉を遮り、次なる授業の始まりを告げる。

.....。

「え、えっと、それじゃあ後でね。オルコットさん」

私はいつもの笑顔を浮かべる。すると、そんな私の態度に、何故か

目を白黒させるセシリ亞。

まるで私が先程とは別の人間に切り替わったかのように驚いている。

……考えすぎか。

教えて！ 八神先生！

優「正直に言おう。現時点でのこの小説モードキの評判は悪い」

夏「先生！ なぜ頑なに小説扱いするのを拒むのかはこの際置いておきます。評判が悪い理由は分かっているんですか？」

優「ああ。作者の頭の悪さや文章構成能力の無さは勿論の事だが、何よりも主人公の背景に重きを置き過ぎだ。つていうかややこしい定石だ」

夏「ややこしい？」

優「普通転生モノでは、基本的に転生先の世界をメインに描くのが夏「ふむふむ」

優「しかしこの作品はどうだ？ 主人公に変な設定を持たせたせいでそれについてのバックボーンを描かねばならなくなり、それに作者の能力が追い付かず、結果として事情背景についての説明はこんがらがり、主人公のキャラ付けもしなくてはならず、転生後の世界での活躍が薄くなっている。まともにチート能力を発揮したのが連載してからかなり経つてからだったのがいい例だ」

夏「確かに。それまではキャラを印象付けるための日常シーンばかりでしたね。しかもそれもイマイチでしたし。っていうか無駄が多いし。明らかに読者の需要と離れてますね。しかもこじまでも来たら直すに直せませんし」

優「そうだ。そして主人公の背景を構成する上で、大きくウェイトを占めているヤツがいる。ソイツがさらに問題だ。というかソイツの存在 자체がややこしい。面倒だ。後付けキャラのぐせに出しゃばりやがって」

ガラツ

8 「呼んだ？」

夏「名前適当だな」

優「これはこれは。本作品屈指のウザキャラにして絶賛大不評の自称天才エイトさんじゃありませんか」

8 「俺は悪くない。悪いのは作者の頭だ」

夏「そんなことよりお前の名前つてさ、明らかに八神の八からとったよな。明らかにネーミング手抜きだよな」

8 「つるさいわ雑種め。そもそも何故か俺がパツと出のキャラっぽく見られているようだが、一応言つておくと存在自体は初っ端から示唆されている」

夏「でもそれが伝わつて無いなら意味無いだろ。しかも書き始めた当初は全くの別人を出す筈だったんだよな」

8 「だから作者の頭が悪いんだよ。そしてなんかややこしいみたいに言われてたけど、一応オリキャラは2人だけだし、場を引っ搔き回しているように見えるかもしけないがそれは主人公との間だけで、作品全体で見た時には」

優「はいはい言い訳言い訳。まあ、この後書き自体も言い訳だけどな」

夏「ああ、やっぱり？ そうだと思ってたわー。俺初めからそうだと思ってたわー」

15 (前書き)

友達？ いないない（笑） え？ 彼女たち？ ああ、俺のハーレム。

＝サワ版 羽瀬川小鷹

突然だが、世の中には覆しよの無い選択といつものがある。

例えば自動販売機での選択。

一度購入したジュースは返品できないし、ましてや他の物と交換など尚更だ。当然金など返つてくるはずもない。

例えばギャンブルでの選択。

一度賭けた金は決して戻る事は無いし、仮に負けでもした場合、まるでメビウスの輪のように出口の無いギャンブルコースが口を開けて待っている。当然そこに入ってしまえばその選択は覆せない。

このように、選択に対しても拒否権が発生することが無いなどと云うのは日常茶飯事なのである。

え？ ギャンブルは日常じゃない？ 気のせいなのである。

「結論から言おう。八神、お前には日本の代表候補になつてもいいから」

授業開始直後、いきなり千冬さんに廊下に呼び出されたかと思えば、なんともまあぶつ飛んだお話をぶちかましやがったのだ。

突然の展開に軽く混乱する頭を落ち着かせ、なんとか冷静に対処する。

「えっ、いやですよ」

あっ、間違えた。……いや、間違えてないか。これは紛れも無い本音だ。

即座に吐き出された本音に、溜め息をつき、こめかみに指をあてる千冬ちゃん。

「確かに逆らつ事は許可したが、まさかこんなにも早く実践されるとはな……」

許可したのかよ。すみません、聞いてませんでした。

内心で謝罪する私をよそに、千冬ちゃんは毅然とした表情に戻り、淡

々と言葉を投げつけた。

「だが、お前に拒否権は無い。織斑の騒動で遅れたが、先程申請が受理されたとの連絡があった。……まあ、お前の場合は候補生と言つても書類上の身分でしかない。IS適性も高くはないし、搭乗経験も浅い。これが関連書類だ。この中に適性検査の結果も入っている。目を通しておけ」

そう言つて渡されたのは、茶色とベージュの中間色の様な、なんと いう色なのか良く分からぬけど何故か多く一般普及しているあの 封筒。

「はい」

返答と共に一つの疑問が湧き起つたが、それはすぐに処理された。

何故私が代表候補なのだろうか。考えてみれば分かる事だ。

私は現在IS……つまり、専用機を所持している。

専用機というのは原則として国家・企業に所属する人間にしか与えられない。しかし当然ながら私のバックには国家も企業も存在しない。

となると、周囲から見た時に、私が専用機を所持しているという事 実はかなり不自然に映る。

一応ISを手に入れた経緯の特異性から、所持しているという事実、 及び推薦入学という事に関して周囲には秘匿されている。

推薦について知っているのは、私の周りでは一夏と弾、それから学 校の教員等関係者、そして家族だけだ。ISの存在に関しては家族 しか知らない。

しかしそのような秘密はいつまでも隠しきれるものではない。いざ

れは露見するだろ？。

そうなつた時のための書類上の身分　　国家代表候補生といつわ
だ。多分。

すると今度は別の疑問が首を擡げる。
私がＩＳ入手したのは2年前。一夏の騒動が起きる前だったはず
だが……？

「ああ、申請が遅くなつた件についてはお前の、」両親からの頼みで
な。せめて中学にいる間は普通の子供として過（）して欲しかつたら
しい。現に知識の学習はしても搭乗訓練などはしていなかつただろ
う？最近のＩＳ至上主義に流されない良い親だ。ソレが兵器だとい
う事を良く理解している

「やうだつたんですか……」

お父さん、お母さん、気持ちは嬉しいよ。けどさ、そういうことは
私に一度話を通すべきじゃないかい？　つていつかナチュラルに心
を読むんじやないそこの教師。

誘拐事件の後処理について、私は殆ど詳細を知らない。

ところの、私の入院中にそれが済ませたからだ。そこにはいる千
冬さんとドイツ軍が奔走したのだそうな。

なのでその際に両親がどう対応したのかも知らないし、もしかしたらその事件がきっかけでＩＳが嫌いになつたのかもしぬないが、結局詳しい事は分からぬ。

「話は以上だ……つと、その前に、候補生の肩書も間に合つた事だ
し、別にもうバレても問題は無いが一応聞いておく。推薦やＩＳの

所有に関して他人に話してはいないだろうな?」

教室へ戻ろうと踵を返した千冬さんだが、立ち止り、振り返る。問題無いと言つても、結局はバレないに越したことは無い。先程も話に上がつたが、私は搭乗訓練などは殆どしていない。故に操作に慣れておらず、正直に言つと素人も同然だ。そんな人間が代表候補生などと言つても信じられないだろう。

「はい。話してま……あ」

その時に浮かんだのは2人の顔。五反田弾と織斑一夏だ。彼らには推薦入学について話してしまった。

私の反応に、千冬さんの視線が鋭さを増す。

「誰に話した?」

有無を言わせないその迫力に別にびびつてなんかないんだからっ!

「推薦に関して中学時代に2人。うち一人は一夏くんです」

びびつてなんか……ないんだから……

千冬さんは聞き覚えのあるであろうその名前を反芻し、まあいいか。と結論付けた。

「アレも事件の関係者……といつか当事者だからな。知つておくべきか。まあいずれにせよ、ある程度実力がつくまでは隠しておいた方がいいだろうな。後で私からアレに言つておこう。

……それでも、お前らは名前で呼び合つよくな関係なのか。それについても訊いておこう」

にやり、と意地の悪そつ口の端を吊り上上がる千冬さん。

勝手にしきよブラン。

あ、EIS適性ランクについて聞きそびれた。……まあ、結果は封筒の中らしいし、後で確認しよう。

「遅くなっていますまい。ではこの時間では実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

教室に戻り、教壇に立つ千冬さん。どうやらこの授業はそれなりに重要らしく、山田先生もノートを広げてこる。

しかし授業を始めようとしたといひで、千冬さんは何かを思い出したような表情になる。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めなきといけないな」

クラス対抗戦？ 代表？ …… ああ、あれか。セシリ亞攻略イベン
トか。ならば私には関係ないな。

隣では未来のクラス代表である織斑一夏が千冬さんの言葉を何とか
解読しようとしていた。

しかし一向にその解読は進まないようで、見かねた千冬さんが口を開いた。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

教室にざわめきが広がる。当然ざわめきと言つてもカイジのようなざわめきではない。どちらかといふと、これから起ころうであろう未来に対する期待を込めたざわめき。

ちなみに一夏は、意味は分からぬけどとりあえず納得しどけ、みたいな顔をしている。一番の当事者のくせに何やつてんだか。

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

どこからか嬉々とした声が上がる。話題に上がった本人は、何故かきょろきょろと周囲を見回している。まるで自分以外の”織斑くん”を探しているようだ。

「私もそれが良いと思います！」

便乗する生徒、そしてうんうんと頷く織斑。アホか。

そのアホを放置し、教壇で千冬さんが何でもなによつて告げる。

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？ 自薦他薦は問わな
いぞ」

と、一夏でよつやく隣の席から、机の揺れる音と共に、現状を把握
したアホの間の抜けた声が響く。

「お、俺！？」

そう言つて立ち上がつたのは勿論一夏だ。

その一夏に対し、クラスの女子達の好奇と期待に満ちた視線が向け
られ、実の姉である千冬さんはその名の如く冷たい視線で射抜
かれる。

「織斑。席に付け、邪魔だ。さて、他にはないのか？ いないな
ら無投票当選だぞ」

その言葉に慌てて待つたをかける一夏だが、拒否権はないとい
う千冬さんのありがたいお言葉に切り伏せられる。

はつはつはつ、諦める。

しかしそこで諦めないのが男の子。ただ、今回その諦めの悪さが
裏目に出たと言えよう。

焦りに焦った一夏は、とんでもないことを口走つてくれたのだ。

「だ、だつたら！　俺は八神さんを推薦します！」ここだつて推薦で入学しているし、俺なんかよりも優秀です！」

後者の『推薦』といつワードで、先程とは質の違ひざわめきが広がる。

……まつまつ、なかなか面白い冗談だ。ギャグセンスがおつかんな一夏にしてはよくやったんじやないか？

.....。

「え？　私？」

side：一夏

教室がざわめく中、俺は後悔の念に苛まれていた。

(馬鹿か俺はッ！　守るつて誓つた女の子を早速矢面に立たせてど

(うするー)

クラス対抗戦……一応 IHSによる戦闘では命を落とすことはないと聞く。しかし操縦に支障の出るレベルの怪我を負う事はあるそうだ。そんなものにコウを出すくらいなら俺が出た方がマシだ。

「あの……やつぱり今のは

無しで。そう言い終える前に、俺の言葉を甲高い声が押しのけた。

「待ってください！ 納得がいきませんわ！」

声の主は、先程のイギリスの人。たしかセシリ亞って名乗ってたな。

「そのような選出は認められません！」

以下長かつたので内容を大雑把に纏めると、

ええ加減にせえやクソジヤップが！ こちとら来とうもない極東の後進国にまでわざわざ来てやつとんねんぞ！？ それだけでも感謝せえ！ しかも普通に考えて代表は自分らちゃうやろ！ 実力トツプはこのワイヤー！ サーカスちゃうねん！

とのこと。別にエセ関西弁で纏めた意味は特にない。

ここまでは俺も割と聞き流していた（コウは意識が飛んでいた）が、

「大体クラス代表が男などと恥さらしもいいところです！ そちらの方にしたつて推薦だか何だか知りませんが、それだけで私よりも

優秀だなどと思い上がりも甚だしいですわ！ 第一こんな小国で推薦を受けたからと言つてもたかが知れています！ こんな極東の猿ごとに代表を任せるという屈辱を、このわたくしに一年間も味わえとおっしゃるのですか！？

この言葉を聞いた時、俺は思わずセシリアを睨みつけていた。

この女尊男卑の風潮だ。俺を馬鹿にするのは百歩譲つて分からぬもない。

だが、コウを侮辱した事は許せなかつた。

誘拐された時、真っ先に現場に駆けつけてくれた、自分のために傷付いてくれた、強く優しい少女を、お前は一体何の権利があつて踏みにじつた？

怒りが胸の中で劫火となり、理性を糧に燃えだぎる。

「言いたいことは分かつた。そつち欧洲の流儀に合わせてやるよ。その方が四の五の言づよつわかりやすい」

俺は静かにその炎を叩き付けた。

「決闘だ。セシリア・オルコット」

15（後書き）

いやー、認識の齟齬って怖いね。

ところで日本でも2009年から8年に決闘罪で逮捕された事件があつたそですよ。

「せめて死に様で我を興じさせよ。雑種！」

言葉と共に放たれる宝具の嵐。

その標的は突如として現れたサーヴァント　バーサーカー。

一つ一つが必殺の威力を持つ宝具の群れが狂気に染まつた英靈へと降り注ぐ。

直後、それらは万雷の如き轟音を響かせ、大地を抉る。そして巻き起こされる惨憺たる破壊。

「ほんげえええ！」

破壊音に混じり、バーサーカーの野太い叫びが吐き出される。

粉塵が視界を遮る中、彼が最初の脱落者となる事を誰もが確信していた。

しかしその予想は、誰もが予想だにしなかつた意外な形で裏切られる。

彼のサーヴァントを覆っていた粉塵が晴れ、その姿があらわになる。

「ほう……」

騎乗兵のサーヴァント　ライダーが感心したように顎を擦る。

対照的に、宝具を放つたサーヴァント　アーチャーはその貌を憤

怒に染めていた。

各々が恣意な反応を見せる中、満身創痍ではあるものの、狂戦士は
いまだ健在であった。

相反する表現ではあるが、その表現が最も相応しいのだ。

彼の皮膚や身に纏う淡い青色の衣装は所々焼け焦げ、頭からは煙を
上げている。

しかしその瞳には強い意志がぎらぎらと煌めいており、宝具が突き
刺さり、もはや原型を留めていない大地を目まぐるしく奔走してい
る。

そう。彼はアーチャーの宝具を拾い集めていた。

そして全てを抱え込むや否や、そのむな苦しげに顔面に下卑た笑みが
貼りつく。

彼の瞳には強い意志

\$マークが浮かんでいた。

そして逃走。

バーサーカーはサンダル特有の音を煩わしく響かせながら、漫画の
ように土煙を上げて疾駆する。

その姿が視界から消えた頃、ライダーのマスターである少年がぼそ
りと呟いた。

「何なんだあのサーヴァント……何もかも規格外すぎる。全ステー
タスがEXだなんて聞いたことが無い……」

これは、

「バー サーカー！ 戻つてこ… ゲホッ ゲホッ」

「うるさい！ 病人は大人しく寝てろ！ ワシはこれを売りに行く！」

金に狂つた英靈が織りなす、運命の物語。

教室を支配する張りつめた空氣。

その中心に居るのは2人の生徒。

世界で唯一ISを稼働させることが出来る男
イギリスからの留学生にして国家代表候補　　織斑一夏
セシリ亞・オルコット

互いの瞳に宿るは明確な敵対の炎。火花を散らして静かに対峙する
2人に、誰一人として動けずにはいた。

しかし、そこで別の方向からの声が両者の熱を削ぐように、冷たく、
機械的に、淡々と響く。

その声を発したのは、教壇に立つ織斑千冬だった。

「それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。
3人ともそれぞれ用意をしておくように。では、授業を始める」

”3人”という単語に反応したのは2人。

1人は先程の織斑一夏。もう1人は、彼の隣で、その人形の様に端
整な顔を嫌そうに歪めている女子生徒　　八神優。

2人のうち、口を開いたのは織斑一夏だった。

「ちょ、ちょっと待つてくれよ千冬姉！」

「織斑先生と呼べと言つただろ？」「

狼を思わせる鋭い眼光に一瞬たじろぐが、なんとか食い下がる。

「『め……すみません。織斑先生。ってそんなことより、八神さんへのクラス代表の推薦はなかつた事には……』

「出来ん。世の中、覆すことのできる選択ばかりだとは思わないことだ」

実は彼が『推薦入学』などと口走らなければその限りでは無かつたのだが、今の彼に知る由はなかった。

セシリアのような国家代表候補生ですら、入学試験を受けてここに来ている。つまり推薦入学とはそれほど特異なレアケースなのだ。一体どれほどの実力を持っているのか、と周囲から勘ぐられても仕方が無い。幸いと言うべきか、現在の八神優の肩書は代表候補生。それで説明が付かないことも無いだろう。しかし同じ代表候補であるセシリアは彼女のように推薦を受けたわけではない。

このように不安定な立ち位置である彼女の存在が周囲に知られてしまった以上、ここでクラス代表の候補から彼女だけを外すという行為は彼女の立ち位置の不自然さを余計に浮き彫りにしてしまう。

千冬が一週間という猶予を設けたのは、自身の弟である一夏のためであると同時に、優に対する「一週間で候補生を凌駕しろ」という無言の配慮……といつもいつの無茶振りだったのである。

「ほんつつとうにすまん！」

私は何度も田の前の男の謝罪と、周囲からの奇異の視線に辟易し、溜め息をこぼす。

昼休みに入り、奢ると書いて聞かない一夏に誘われて（筈は誘う前に居なくなっていた）食堂まで来たはいいが、正直これは予想外に耐え難い。

ここに来るまでは大名行列の如くクラスの殆どが後を着いてくるし、食堂に着いたら着いたで他学年も交えて珍獣扱いだ。いや、私が珍獣ではないことは理解しているが、それでもその珍獣と一緒に居るというのはそれなりに好奇の対象になるようで、ここ十数分程ずっと視線に晒されていた。

「ええい！ 雜種風情が誰の許しを得て我を見ている！ その不敬、万死に値するぞ！」

そう叫んで蔵の中身をぶちまけようと何度も思つた事か。

しかしその度に、他人を傷つけることを嫌う正義の味方が金ぴかAIOを木端微塵に切り刻み、私を思いとどまらせる。

しかし、人が多い場所というだけでも気分が悪くなるのに、それに加えてこの纏わりつくような視線。

食欲失せるわ……。

「それよりも大丈夫なの？」

いつまでもネガティブな方向へ向かう思考を切り替え、田の前で頭を下げる男に訊ねる。

大丈夫、とは、無論来週にある決闘とやらの」とだ。

「え？ ああ、大丈夫だ」

顔を上げ、軽く肯く一夏。その表情からは自信が滲んでいる。マジで大丈夫かよ。いや、まあ信じてるけどね？

「一週間あれば基礎くらいはマスター出来ると思つ。まあ、入試の時は一発で動いたし、多分なんとかなるつて。あつ、でもクラス代表になるのはちょっとなあ……」

「や、やつ……」

……いや、信じてるよ？ マジでマジで。ホントだつてば。

最終的な結末を知つていながらも、一夏の態度に一抹どことか多大な不安を覚えてしまつ。

コイツの根拠のない自信は一体どこから来ているのだらうか。

「俺が言つのも何だけどさ、ユウは大丈夫なのか?」

そう言つて定食の味噌汁を啜る一夏。いや、ホントにお前が言つたこの元凶め。

つていうかコイツは何であんなに怒つてたんだ? 残り聞き流してたからまったくわからん。まあ聞いていたところで私は怒らなかつただろ? けど。どうでもいいし。

しかし言われてみればそうだ。なんだかんだで私も来週には鬪わなければならぬ。千冬さんがくれた一週間という猶予、これをどう活用するか……

なんてことを考えるのは主人公の仕事であつて、私が考えることはやない。

「うーん、私はわざと負けようかな」

そう言つていつも通りの笑顔を作る。後でいろいろと言われそうだが、なんかもう面倒だしどうでもいいや。プライド? そんなもん都市伝説だろ?

「ふーん、そつか…………ってわざと?」

一夏が、何を言っているのか分からないとでも言いたげに呆けた表情を見る。

「うん、わざと。私は別にクラス代表になりたいわけじゃないけど、オルコットさんはなりたそ娘娘たし」

自分から喧嘩を吹っ掛けた手前、手を抜くわけにはいかない一夏とは違い、私がわざわざそんな決闘なんて汗臭いものに付き合つてやる義理はない。

英霊の能力を使えば一瞬で片が付くが、そんなことをしてしまえばそれについての説明が必要になつてくる。それはそれで面倒だ。

ふと一夏を見てみると、なんとも複雑な、形容し難い表情を浮かべている。

不満と羞恥と羨望と、その他いろいろと混じったような、上手く言葉に出来ない表情。

口を開いたり閉じたりすること数回、ひとしきり躊躇つたのち、その口から言葉が溢れ出た。

「その……コウはそれでいいのか？　あんなに言われて、何も思わないのか？」

あんなに馬鹿にされたのに愚痴一つ溢さない彼女に対する不満

彼女からすればその程度だつた事に対しても無く怒り、それに任せて口を滑らせた自分の幼さに対する羞恥

何を言われても笑つて許せる、彼女の強さと優しさに対する羨望いや、本当にそれは本心なのだろうか、もしかして心中では傷付いているのではないかという不安

自分の抱いた怒りは間違っていたのだろうかといつも

俺が一体何を思つたのかは分からぬ。しかし、気付くと問いを投げかけていた。

対する目の前の少女は、俺の質問の意味がわからぬているのか、何かを思案するように口を開け、ややあってよじかへ言葉を発した。

「えつと、私が何を言われたのかは良く分からぬけど……」

あつ、そうだった。セシリ亞の罵倒中は意識飛んでたんだった。しかしコウの言葉はそこで終わらない。再び心地よい声音が耳に響く。

「私はそれでもいいよ。一々取り合つてたらキリが無いし、結局はどうちかが折れないと話が進まないでしょ？」

ユウの選択は大人びていて、俺みたいなガキとは大違いだった。たしかにユウの言った通りにしていれば、大概の面倒事は避けられるだろう。

しかし、それではユウが救われない。ただやり過ごすだけで、結局ユウ自身の意思は何処にも無い。

思えばユウが感情を顕わにした所を、俺はあまり見たことが無かった。

いつも浮かべている笑顔の下にあるものを、俺は知らなかつた。
「怒りもしないで、ただ笑つて許して、そいやつてずっと我慢して
るだけでいいのか？」

俺の言葉に、ユウがふわりと笑みをこぼす。そんなに今の俺の顔はおかしかつたのか？

「うん、それでいいよ。だつて私の分まで一夏くんが怒つてくれた
んでしょ？　だつたらそれでもう十分」

ガツン、と、頭に衝撃を受ける。いや、もちろん比喩表現であつて実際に殴られたりしたわけではない。

気が付くと、俺は馬鹿みたいに口を開けて、彼女の笑みに見惚れていた。

思わず顔が熱くなる。

俺の選択は間違いじゃなかつたとこ「女堵

ちやんと彼女の負担を背負つてあげられていたとこ「歓び

彼女が強いのではなく、ちやんと自分を頼つてくれていたとこ「興奮

確かにそれらが俺の内から湧き起りつくるのを感じたが、違う。
俺を今支配してこる熱はそんなものじゃない。

照れているのか？　いや、違う。ではこの感情は一体……？

私が持つてているのは基本的に『何かをしたくない』という欲求であつて、『何かをしたい』という欲求では無い。故に、怒りなどという能動的かつ攻撃的な感情は要らない。そもそも持ち合わせていない。探してもどこにもそんなものはないからな。つていうか面倒だ。

だから怒れつていうなら代わりに頼むわ。

その程度のニュアンスで言つたのだが、何故か一夏は頬を染め、口をあんぐりと開けていた。
どうしたつていうんだよ……。

「一夏くん？」

「え？……あ、ああ、すまん。ちょっとぼーっとしてた」

そつ言つて乾いた笑いを漏らりし、何故か逃げるようご飯事の手を速める一夏。

そんな一夏の反応を疑問に思いながらも、グラスに入つた水を一口喉に通し、この話題を締めくくることにした。

「それに、私は一夏くんの事を信じてるからね。最後にはちゃんと勝つ（クラス代表になる）つて。だからわざと負けても問題無いんだよ」

一夏は一瞬どきりした様な表情になるが、すぐに見慣れた笑顔を浮かべていた。

「はははっ、そこまで信頼されてるつていうなり、ちゃんとそれに応えないとな。つていうか結局そこかよ」

「うん。だから頑張ってね」

「ああ、分かつてる」

今にして思えば、私の態度も随分と軟化したものだ。数年前ならこんな軽口をたたき合いながらも心の中で罵倒していたのだが。やはり直に触れ合って認識が変わったのが大きいのだろうか。

内心で感慨に浸つていると、物凄く聞き覚えのあるお声が私の耳に届いた。

「ほう、今『わざと負ける』などとこいつ不屈きな発言が聞こえた気がしたが、気のせいいか?」

「デデンデンデデン　デデンデンデデン　何故か脳内でターミネーターの曲が流れたが、気のせいだらう。」

その絶対零度を思わせる声色に、全身の筋肉が硬直する。何故アンタがここに居る?

鍛ついた首を動かし、後ろを振り向くと、そこに居たのは大魔神こと織斑千冬。

「イツ、ジンから聞いていやがつた……！」

「やうだな。強いて言つなら、お前らのやり取りが甘つたるくなつた辺りからだな」

いや、エレヤ。

全く心当たりが無い私とは対照的に、一夏の顔が再び熱を持つ。
……だからジンだよ！

「まあ、それは今は置いておく。それよりハ神」

「は、は」

思わず笑顔が引きつる私に、千冬さんは死刑宣告の方がまだマシと言える宣告を下した。

「手抜きなどしてみる。一ヶ月間、毎日放課後に私が個人レッスンをしてやるわ」

〇 〇 〇

その日の放課後

私は寮の浴室へと向かつて行った。聞いた話によると一人部屋らしい。やはりというか何というか、入学までの経緯の特異性から、周囲に事情が漏れにくくするための処置だとのことだが、正直もうあまり意味がない。

ちなみに推薦入学について他の生徒に訊ねられたが、面倒だったのを一夏を盾にして逃げた。
すまんな一夏。

「いじいか」

目の前には一つのドア。
私の記憶が確かならば、部屋の場所は一夏と篠の隣だつたはず。そしてやろやろ……

「つむおつー？」

ああ、やつぱりか。隣の部屋の扉の向こうから聞こえた耳によく馴染んだ悲鳴。

たしか篠の入浴中に部屋に入っちゃうんだよな。……なぜこんなことだけハツキリ覚えていい?

そんな割どどうでもいい事を考えていると、その扉が勢い良く開き、中から男子生徒が弾かれるように飛び出してきた。

そして彼は一息ついで、閉めた扉に背を預ける。

「助かつ　」

てないんだなそれが。

彼の言葉が終わる前に、乾いた音を鳴らし、ドアを貫通した木刀が現れる。

おお、すげえ。

そしてドアの向こうに消えたかと思えば、再び、今度は彼の頭蓋を狙つて木刀が突き出される。

そしてそれを避ける男子生徒こと織斑一夏。

「つて、本気で殺す気か！ 今のかわさなかつたら死んでるぞ！」

悲鳴にも似た怒声を上げるが、むしろそれは逆効果だったようだ。一夏の声に誘われ、次々と部屋から出でてくる女子生徒達。しかも全員ラフな格好をしている。

……部屋に入るか。

周囲の状況に困惑し、田のやり場に困っている一夏を放置し、私は部屋のドアを開けた。

「ド、ドウー！」

声のした方を向くと、そこにいたのは整った顔にびっしりと書かれていた『助けて』というメッセージ。

「……はあ、今だけだよ？」

「さすがドウー。やつぱり持つべきものは友達だよなー！」

結局、私は一夏を招き入れた。

コイツを部屋に入れたとあっては明日も質問攻めに遭いそうだ。まあ、そうなつたらまたコイツを盾にすればいいか。

しばらくして、外の騒ぎが収まった頃。

「篠ノ之さんとちやんと仲直りできる?」

「子供じゃないんだから大丈夫だつて」

そんなやり取りをしながら一夏を外へ追い出す。

私としては鈴を応援しているから、別にお前と篠の仲が悪くなつとどうでもいいけどな。

「さて」

誰もいない室内。私は一人静かに、己の内側へと意識を沈める。

なんでこんなことをしているのかといふと、千冬さんに命令されたからだ。

千冬さんいわく、

「推薦の件はバレたし、もう手遅れだから、いつそのこと国家代表レベルにまでなっちゃえよ。そうすれば推薦つていう特殊な枠で入学したっていう理由づけにも役立つだろ。勿論来週は専用機使つてもらうからそのつもりで。いつまでも使わないと勿体無いし、いざ使つて時に使えないんじゃ意味ないし。っていうか2人が専用機使う予定なのにお前だけ使わないつて明らかにおかしいだろ。自分が他人の目にどう映つているのか考えろや」

とのこと。

ISの展開自体は人体に影響はないらしい。摘出はタバネさんとやらにしか出来ないらしいが。

つまり私が今すべきは、自身の専用機を完璧に使っこなせるようになる事。

物凄く不本意かつ面倒だが、後に待ち受ける補習の事を思えばこんなのが苦じじゃないぜ！

少しずつ己の中を探つていぐ。すると、どこかで冷たい感触に引っかかる。

……「れか？」

その感触に向かつて呼びかけるように意識を集中する。

突如、脳内に現れるイメージ。

黒を基調とし、所々に白く細いラインが数本入っている。
装甲は細く、どこか冷たい印象を与えるその機体が、私の身体に顕現する。

「……出来た」

IISの展開が完了すると、機体情報が脳に直接流れ込んでくる。あーどうでもいい。

すぐに解除し、同時に強い倦怠感に襲われ、その場にへたり込む。

ああー、だるい。IISの展開マジだるい。適性低いからかな。

「……そういうばまだ検査結果を見てなかつたな」

私は今朝貰った封筒の中を漁り、担当のソレを取り出した。

さて、あまり高くはないとのことだったが、一体結果は

「…………?」

結果は物凄く微妙だった。

16（後書き）

なんか最近説明的な文章になつた気がする。
そして一夏の中でどんどんコウが神格化されていく。
そんなことよりカバーティやなんづせ！

「前回までのあらすじ」

なんだかんだでE.U学園に入学した一夏と優。しかしそこで待ち受けていたのは専門用語といつ名の呪文の羅列。ノートを広げたまま放心する2人。そして2人を襲うクラス代表なる物の選出イベント。

そこで一夏はつい口を滑らせてしまい、優も巻き込んでイギリス代表候補生、セシリア・オルコットに決闘を申し込んでしまう。自分のせいでも優を巻き込んでしまったと後悔し、謝罪する一夏。しかし優から飛び出た意外な言葉に、一夏のハートはトウントウクきたのであった。

一夏（や、やだ。顔が熱い……）「れってまさか、恋……？」
優「…？」「どうかした？」

一夏「なつ、なんでもない！／＼／＼（恥ずかしくてコウの顔を見れないよ……。もうつ、なんでコウはこんなに平気そうなの！？）」

さて、とりあえず頂いたワードを元に主人公のH.Uを考えましょうかね。

一応デザインは希望により第四次バーサーカーのよつなフォルムにするつもりです。

ただ、丸パクリだとなんだかアレなので、あくまでベースというか、ランスロットを模したデザインでいこうと思います。

side · 夏

トントントン

包丁が心地よいリズムを刻み、食材がまな板の上で姿を変える。

ジュー……

熱を帯びたフライパンの上で、先程スライスした食材を水分を踊らせる。

俺が今何をしているのか。100人が聞かれれば100人が料理と答えるだろう。

というわけで、俺は今わざわざ早起きして昼食の弁当を作っている。

何故か。その理由を知るためにには、時は昨日の放課後。俺が篠に部屋を叩きだされ、コウの部屋に避難したところまで遡らなければならぬ。

「ふう。いや、ホント助かつた。ありがとな、ユウ」

俺は命の恩人（社会的な意味）である少女　八神優へと感謝を告げた。

あのままあそこに居たら今頃どうなっていたことか……。

対するユウは困ったような笑みを漏らし、ベッドに腰を沈める。

「別にいいよ。それよりも来週のためにいろいろと準備をしなくちゃいけないから、私としてはそっちの方が大変かな~」

ユウには特に俺を責める意図は無かったのだろうが、そうと分かっていてもついつい過敏に反応してしまう俺がいるわけで、

「それに関しては本当にごめんなさいでしたーッ！」

気が付くとサラリーマンもびっくりの勢いで頭を下げていた。

ふむ、将来はきっといい社会人になれるぞ。俺が保証する。ん？

俺が保証しても意味無いのか。

光の速さに迫る俺の謝罪に、思わずといった感じで苦笑するユウ。そして、そういうえば、と呟いてその身を乗り出した。

「隣つて篠ノ之さんだよね？　朝も親しそうだったけど、どうこう関係なの？」

「昔仲の良かつた幼馴染つて所だな」

俺の返答に、ふーん、と、自分で聞いたくせに嘲と興味無さげに返

すコウ。

「あつ、それとひ、昼休みはああ言つてたけど、結局今日の授業は理解できたの？」

言われて、うつ、と言葉を詰まらせる俺。

あんなものを理解出来るわけが無い。だつて日本語じやないし。

俺の反応から察したのか、コウはまたしても困つたような笑みを浮かべ、「ああー、やっぱりね。そりだと思つたよ」などと言つている。

くつ、言つ返そりも反論するだけの材料が無い。

「セウヒコウは

どうなんだよ?」といつ言葉を飲み込む。同時に、俺のピンク色（見たこと無いけど）の脳細胞に電撃が走る 一

そうだ。田の前の少女は自分より遙かに優秀な生徒なのだ。
巻き込んだ拳句におんぶにだっこで申し訳ないが、彼女こそ今の俺に必要な人材……！

「頼む！ 僕にHJについて教えてくれ！」

その瞬間、俺は光となり、土下座していた。

「……で、その見返りが俺の弁当、か」

手を動かしながら、特に誰に聞かせるわけでもなく独り言ちる。ちなみに料理の腕前に関しては圧倒的にコウの方が上手い。あれはもう料金を払いたくなるレベルだ。

では何故そんなコウが俺の弁当などとこう物を所望したのか。

コウ曰く、

『他人に作つてもらう料理つていうのはそれだけでありがたいからね。自分で作つてもいいけど、それだと中身が初めから分かつちゃうから、その分楽しみが減るし。あつ、そうだ。篠ノ瀬さんも呼んで3人で食べよう』

とのこと。いひじて俺はその後、篠を昼食に誘つべく『ちやんと伸直りしなさい』との命令を賜り、昨夜はひたすら謝りたおしたといつわけだ。

そういえばコウって好き嫌いとかあるのか？ 昨日聞いておけばよかつたな。

「…………んつ…………いちか？」

「篠？ 起きたのか？」

ベッドからそのままと這い出していくポーテールの幼馴染こと篠ノ之箇。

そしてその箇が俺の姿を見て、険しい顔で一言。

「……お前の背後に見える恋する乙女のよつなオーラは何だ？」

「はあ？ 何言つてんだ？」

一言じやなかつたな。

しかし本当に「ヤツは何を言つているんだ？ 俺が恋する乙女の？ いや、男だし。

俺のリアクションに何やら安堵したよつな表情になり、そつかと思えば怪訝な顔になる。忙しいヤツだな。

「それで、何をしている？」

あれ？ 見て分からなかつたか？

「何つて、料理だよ。僕の弁当を作つてるんだ。箇の分もあるからな」

一瞬箇の周辺がパアつと明るくなつた気がしたが、すぐに俺から顔を逸らす。……やっぱり嫌われてんのかな。

するとここで、俺の言葉に含まれていた別のニュアンスを感じ取つたのか、視線だけを俺に向ける箇さん。心なしか、そこには不安そうな色が浮かんでいる。

「その、『も』という事は、他に誰か」「

「ああ、ユウと俺の分だ。後でちゃんと紹介するけど、ユウっていうのは俺の中学校時代からの友達で、弁当を作ってるのもユウからの頼み。今日の放課後にHSのことを教えてもらひ代わりにな

何故か今、『友達』という単語が物凄く喉に引っかかるが……気がのせいか。

しかしユウは本当に優しい。巻き込んだ元凶である俺に嫌な顔一つ見せず、たかだか弁当程度で俺に協力してくれるというのだから。さらに俺と篠の仲も気にかけてくれる。本当に頭が上がらない。

「……ふん、そうか」

この後、篠の機嫌は物凄く悪くなつた。

ちなみにユウが見返りに弁当を求めてきたのは、「食堂は人が多いから行きたくないが、かといって弁当を早起きして作るのは面倒」という理由なのだが、当然の如く俺が知る由は無い。
そして篠を誘つたのは、ただ単にここで篠を誘わなかつたら八神優

とじては不自然というだけなのであるが、やはり俺が知る由は無い。

side out

さて、気まずい。

今は昼休み。人が少ないと聞く屋上までわざわざ足を運び、そこで一夏の作った弁当を食べようというわけだが、気まずい。
どれくらい気まずいのかというと、特に親しくも無い親戚の恋人と食事の席を共にするくらい気まずいのだ。

私はこの空氣を作り出す、額面通りの意味でのムードメーカーに視線を向ける。

篠ノ之箇。一夏の幼馴染にして剣道のチャンピオン……だったはず。

私の視線に気付いたのか、何故か睨みつけてくるモップさん。
やべ、内心でモップって呼んでるのばれたか。じゃあモッピーにするよ。……あつ、これもダメですか。“ごめんなさい。

何故か鋭さを増す眼光に、つい目をそらしてしまつ私こと八神優。なんのこの子、視線で人を殺せそうなんだけれど。は？ 別にびびつてねーし。

といふか私は「コイツに嫌われているのか？」ここに来るのも物凄く嫌そつだつたし。まあ力づくで引っ張つてきたわけだが。

私は何とかこの空氣を払拭するべく、卵焼きを口に運び、一夏に感想を告げる。

「やっぱり一夏くんつて料理上手だねー。すごく美味しいよ」

ちゅつと味付けが甘いかな。まあいいけど。

私の称賛に、照れたように頭を搔く一夏。

「いや、俺の料理なんてコウに比べたらまだま」

と、一夏に苦悶の表情が浮かぶ。見えないようにしてこいつもつだつうが、算様が一夏の後ろに手を回し、力いっぱい抓ついた。

恐らく他の女と自分の想い人が仲良さげに喋っているのが気に食わないのだろう。女の嫉妬つて怖いわー。

とまあこのよつてギスギスと和やかに昼食は進み、とある話題に触れた時、よつやく筈が私に話しかけてきた。

「八神」

「なに？ 篠ノ之さん」

「HISについては私から一夏に教える」

お前は引っこんでろや。言外にそう言われては仕方が無い。別に2人の間に割つて入るつもりは毛頭ないし、大人しく引き下がるとしよう。

「えっ！？ 篠、何言って」

突然の展開に驚く一夏の言葉を遮り、またしても背中を抓る篠さん。思わず乾いた笑いが口から漏れる。

とりあえずその暴力が私に向かないことを切に願おう。多分反射的に迎撃してしまうだろうからな。

「ははは……じゃあ篠ノ之さんに任せようかな。幼馴染らしいし、一夏くんも私より教わり易いんじゃない？」

すると私があつさり引き下がったのが意外だったのか、驚いたような表情になる2人。さらに一夏の表情には半端じゃない落胆の色も見て取れる。

え？ 何かおかしなことでも言いましたか？

そして時間どころのはあつといつ間に流れるもので、ついに決闘当田となつた。

ちなみに私は一度もまともにEISを操作できていない。
いや、できていると言えばできているのだが、なんというか、全く使いこなせていなかつたというか、上手く馴染まなかつたのだ。

理由として考えられるのは4つ。他にもあるのかもしぬないが、私には4つしか思い当らなかつた。

1つ目は、私は自分の意識と身体を別人の物として捉えており、当然EISに関しても同様だ。さらにEISとの精神なシンクロも重要な要素となつてくる。というかいつ誰に貰つたのかも分からぬ物を信用できるはずがない。

故に、それぞれの意思伝達にラグが生じているのではないか、といふこと。

2つ目に、これはEIS適性の低さにも関係してくるのだろうと私は推測しているが、私の身体能力が異常に高いため、それにEISが追い付いていないのではないかということ。

EIS適性とは基本的に肉体的な素質が大きく関わる。そしてこれは

”適性”であつて、身体の強さを測るものではない。要するに私の場合は素手の方が強いのだ。

私の身体がもたらす結果のイメージに、ISが追い付けていない、とこうわけだ。

3つ目は、このISを私に埋め込んだ者（恐らく神、或いは誘拐事件の時に居た誰か）が何かしらの細工をしたのではないかということ。恐らくこの犯人は相当な暇人とみた。

4つ目、才能が無い。

まあこじつけ理由を上げたところでどうしようもない。

私は諦めを伴い、決闘の舞台である第三アリーナへと移動した。

「え？ 一夏くんの専用機つてまだ来てないの？」

第三アリーナ・アピット

そこで困った顔をしているのは今回の主役、というかいつも主役で

ある織斑一夏。

そしてその隣には正妻たるポーテールのヒロイン、篠ノ之簾。

「しかも」の一週間で剣道しかしなかつたつて……」

ふいっ、と気まずそうに視線を床に向ける2人。何やつてんだか。

ちゃんと勝ってくれるのか？ 今更ながら不安に駆られる私。しかし何をどうしたってもう遅い。選択は覆らないのだ。

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

達観する私の耳に忙しない足音が響く。この胸が揺れるような足音

振り向くと、そこには胸に手を当てて呼吸を整える山田真耶先生。

「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」

「は、せこい。かわいい、かわいい」

一夏の言葉に従い、山田先生は深呼吸を始める。

「せこ、セレで出ぬ！」

そして本当に呼吸を止める山田先生。教師のくせに遊ばれてどうす
る。

つていうか話が進まないだろ？

「それで山田先生、そんなに慌ててどうしたんですか？」

私の問いに、山田先生は呼吸を止めたまま答える。いや、ムリだから。

ついに耐えきれなくなつたのか、だんだん顔の色が変わり、

「ふはあつー」

息を吐き出した。

「田上の人間には敬意を払え、馬鹿者」

突如として響く打撃音。見ると、そこには出席簿を手にした千冬さんと、頭を押されて悶絶している一夏。いずれ一夏が何かに目覚めるのではないかと最近密かに思つている。

「えつと、山田先生？ それで用件は……」

「あつ、わつでした！ ついに来ましたよー 織斑くんの専用機ー！」

一枚の板がそれぞれ斜めにスライドし、低い音と共に扉が開く。

その先に鎮座する純白の鎧。飾り気のない、真っ白な装甲。つい、たしかあれが

「織斑くんの専用I-S、白式ですー。」

一夏がI-Sを纏つたすぐ後、千冬さんが私に向き直った。

「白式の初期化と最適化にはまだ時間がかかる。よって先にお前とオルコットの試合を行つ。いいな?」

「はい、分かりました」

この場合は『いいな』 = 『拒否権なし』である。ここ、テストに出るから。

しかしその決定に異を唱えたのは、他ならぬ一夏だった。

「待ってくれ、千冬姉!」

そして響く破裂音。お前も学習しよう。

「織斑先生だ」

「お、織斑先生。先に俺に行かせてください」

一夏の言葉にやや驚く私と千冬さん。大人しく待つだけよ。
そう思う私をチラリと見やり、千冬さんにその強い意志の宿る双眸
を向けた。

「今回の発端は俺です。アイツに喧嘩を吹っ掛けたのも俺です。な
のにその俺が彼女の背中に隠れているわけにはいきません」

は？ 意味が分からん。

しかし千冬さんはなにやら納得したような、それでいて少し嬉しそ
うな面持ちで、一夏に淡々と指示を出す。

「ではフォーマットとフィッティングは実戦でやれ。出来なければ
負けるだけだ。わかったな」

「ああ、分かつてる」

自信たっぷりに言う一夏だが、私は正直物凄く不安だぞー！

そんな心境が表層に出ていたのだろうか、一夏は私に微笑みかけ、
まるで子供をあやすように言葉を紡ぐ。

「大丈夫、心配すんなよ。ユウはただ信じて待つってくれ」

信じじろつて言われてもなあ。いや、信じじろつて言つたけどさあ。で
もなあ、ここに来てこの状況だらお？ ちよつとなあ。

つていかんいかん。不信感を募らせたといひで仕方が無い。たしか

アニメでも勝つてたじゃないか。最終的にクラス代表になっていたじゃないか。ならば疑つたところで無駄なだけだ。心の贅肉だ。使い方があつてているのかは知らんが。

私は思考を打ち切り、いつもの様に笑みを浮かべる。

「……うん、分かった。信じてるからね、一夏くん」

頼むからクラス代表になってくれ！

その思いが通じたのだろうか。少しだキッとしていたが、すぐに、おう、といつもと変わらぬ様子で返事をする一夏。

そして何やり千冬さん、正妻さんと一緒に交わし、決戦の地へと飛び出した。

side：一夏

「あら、逃げずに来ましたのね」

ふふんと鼻を鳴らし、腰に手を当てて俺を見下すようなポーズをとるセシリ亞と、そのセシリ亞を守護する青い騎士 ブルーティ

アーズ。

背後にある特徴的な4つのフィン・アーマーが、その姿になおさら
氣高を感じさせる。

その騎士を駆るセシリ亞の手には、2Mを超す大型レーザーライフル、スターライトmk?が握られており、その銃口は大地に向かう
れている。

「逃げるわけないだろ」

否、逃げるわけにはいかない。今ここに居るのは俺一人のためでは
ないのだから。

セシリ亞は俺のそんな反応が氣に食わないのか、さらりと高圧的な態
度で言い放つた。

「最後のチャンスをあげますわ

銃を持つていない方の手で、俺を捕さず。

「チャンスって?」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボ
ロの惨めな姿を晒したくなれば、今ここで謝ると言つのなら、許
してさしあげないこともなくつてよ」

そう言つて意地の悪い笑みを浮かべ、目を細めるセシリ亞。直後、
危険を感じ取った白式が、セシリ亞が戦闘態勢に移行したことを告
げる。

突然現れた情報に、俺は思いのほか冷静に対処していた。みんなが……彼女が見ているのだ。落ち着け、うるさたえるな。

「そういうのはチャンスとは言わないな

彼女の信頼に応えるため、そして彼女の名譽を守り、代弁するためにも、俺は無様な姿を晒すわけにはいかない。

「そう？ 残念ですわ。それなら」

青き騎士が狙撃体勢に入り、その銃口が向けられる。

来い、セシリ亞・オルコット。

足搔いて足搔いて足搔きまくって、その「」血漫の機体も、奢り高ぶつたプライドも、全部叩き落とす ツ！

「お別れですわね！」

直後に独特な音が耳をつくざまに、その刹那、一筋の閃光が煌めく。

まさにこの瞬間、既に闘いが始まっていた。

モニターに注がれる視線。その先には、縦横無尽に空を泳ぎ、初期設定のままでブルーティアーズに食い下がる一夏の姿。

その手に握られているのは近接ブレード一本。中距離武装を駆使するブルーティアーズとの相性は最悪だ。

しかし一夏はその最悪を突き付けられて尚、その瞳に闘志を宿していた。

なんかえらく気合入つてんなー。

私は一夏の気迫に若干引きながらも、しつかりとその結末を見届けようと目を凝らす。頼むから私にクラス代表が流れてこないようにしてくれ。

一方で、隣では千冬さんや山田先生が驚いた顔をしている。……どこに驚く要素があつたのかは分からぬが。

再び視線をモニターに戻す。ブルーティアーズは相変わらず殆どダメージを負っていない。

しかし白式も掠りこそそれど、直撃はしていない。4つのジット兵器 ブルーティアーズの動きにも慣れてきたのか、どうやら大したダメージは負っていないようだ。

しかし恐らく長期戦に持ち込まれれば負ける。

まあ、自分から喧嘩を吹っ掛けた手前、そう簡単に負けるわけにもいかないのだろう。

と、ここで戦況が動く。

画面の中で爆散する青いビット。一夏がブルーティアーズの一つを両断したのだ。

「……ほひ、気付いたか」

感心したように呟く千冬さん。そう、一夏は恐らくあの兵器……といつか、セシリアの弱点に気付いたのだろう。

「毎度毎度、意識を集中して命令しないといけないなんて、なんとも使い勝手の悪い武装ですね」

つい本心が零れ落ちた。いや、本当に本心か？ 私はアニメで一夏があの兵器に苦戦したことを知っている。さらに実はあと一機残つていることも知ってる。使いこなせねばトントンモ兵器に化けることも。セシリアはあと2回変身を残しているのだ。

にも関わらず、何故今セシリアに対しても批判的に当たったのだろうか。

「いや、あれはオルゴットが使いきれていないだけだ。本来BT兵器は

隣に立つ千冬さんの解説が右から左へ通り抜ける。

何故だ？ 意味が分からない。私が聞いてもいらない罵倒に怒りを覚えたとしても？ そんなわけあるか。

といいで、私は一つの解にたどり着く。

今の私はどちらかとこりと鈴派だから、この試合の後にヒロイン参戦するセシリ亞が疎ましいのだろう。そうに違いない。

元からいる筈は仕方無いとしても、今後ヒロインが増えるのは非常に鈴が可哀想だからな。ちっぽい的な意味で。

1人納得した私は、再びモニターを見上げる。

画面の中の一夏の表情には、幾分かの余裕が現れており、左手を閉じては開き、閉じては開きを2・3度繰り返していた。

見ると、浮遊しているビット兵器は残り一つだ。確かにこれなら余裕が出てきても仕方が無いだろう。

だが考えろ一夏。セシリ亞にとって未だ使いこなせないビット兵器。ソイツでお前を翻弄出来ないと分かっているにもかかわらず、それでもなおブルーティアーズを開拓している理由を。

早い話が、これだけやられました！ という状態を見せ付け、お前の油断を誘っているんだ。
だってセシリ亞はまだ変身を残してるんだぜ？

千冬さんも一夏の油断に気付いたのか、忌々しげに一夏の左手を睨みつけている。

「はああ……すごいですねえ、織斑くん」

山田先生が溜め息交じりに呟くが、やはり千冬さんは険しい顔を崩

さない。

「あの馬鹿者。浮かれているな

「えつ？ どうしてわかるんですか？」

「ラコン千冬さんの中に驚き、即座に反応する山田先生。そしてラコンさんが珍しく感情を乗せて、一夏の懸念について解説する。

その前に

「八神、ラコンがどうかしたか？」

「い、いえ。別に」

「そうか、残念だ。折角校庭を走り回つてもうおうと思つたのだが

「は、はは、は……」

そして山田先生に解説を始める織斑先生。

私は隣のやり取りを視界から外し、ビットを切り裂く一夏に視線を戻す。

……ん？ 切り裂いた？

そり、これで4つあつたビットは全て墜ちた。つまり

直後、セシリ亞の背後から現れた2機のビットが放ったミサイル、それらが起こした爆発により、白式はさながら皿へ塗りつぶされ、かと思えば黒煙に包まれる。

「一夏っ……！」

どこかからか篝の押し殺した叫びが聞こえるが、対照的に、私や冬さんは安堵していた。

これで一夏は勝てる。

「ふん、機体に救われたな。馬鹿者め」

まつたくもってその通り。

煙が晴れ、明瞭になつた画面に映つていたのは、真の姿の白式。本当に意味で一夏の専用機となつたソレが悠然と佇んでいた。

「おひ

結果だけ見れば、一夏の圧勝だった。元々大したダメージが無かつた上、一次移行が終わってからは逆にセシリ亞を翻弄、そして零落白夜のためのエネルギーもたっぷり残っている状態だったので、特に何の問題も無く圧勝。

うん、その結果だけは良かつたと思う。しかし、ブルーティアーズを地に落としただけでは飽き足らず、結局セシリ亞まで落とされてしまいましたとさ。勿論両者の『落ちる』の意味は違う。

はあ……久しぶりに一夏の悪い面を見た気がする。

「ユウ、どうかしたか？」

「つづん、別に」

チツ、これだから鈍感主人公は。

まあとりあえず私の知る流れ通りに事を運ぶことができたといつことで良しとしよう。

思考を打ち切り、一夏に笑いかける。

「それじゃあ一夏くん、少し早いけど、クラス代表就任おめでとう

「待て」

「いやあ、つづきの試合すぐかつたね～」

「だから待てと言つてこる

そして振り下ろされる出席簿。そして受け止める私。チツ、気付かれたか。

私は出席簿を片手で支えたまま、千冬さんに視線を向ける。……そこには無表情の般若がいた。は？ だからびびつてねーし。

「なんですか？ 織斑先生」

「次はお前の試合だ」

「いや、もうこのまま織斑くんでいいじゃないですか」

「いいじゃん。な？ いいじゃん。いいだろ？ ロック三……じゃなかつた。アンタの弟だぜ？」

しかしビリやら私の願いは通じなかつたらしい。

「駄目だ。既にギャラリーは集まっている。それに、お前の実力を測るいい機会だからな。政府からもデータの提出を要求されている」

うつそ……。

まあ確かに、世界で唯一の男性操縦者である一夏と親しいし？ 心臓にIISを埋め込まれた前代未聞の状態だし？ しかもひとりでに傷がふさがるし？ 政府としては私の動向が気にならない方がおかしいってのは分かるよ？ 分かるけどね？

「……じゃあ、私の対戦相手は誰ですか？」

そう、候補は3人。アニメでは2人だったから一度の試合で済んだ

が、3人分総当たりでやると三戦することになる。アリーナの使用時間が限られている以上、あまり試合に費やす時間は無い。

千冬さんは出席簿を引っ込め、淡々と告げた。

「順当に考えて、オルコットに勝利した織斑と戦うべきだろ?」

なるほど、一夏が勝てば、彼は2人に勝利したことになり、3人の中で一番の実力を持つという事でそのままクラス代表に。そして私が勝てば、実力図はセシリアく一夏く私となる。よって私がクラス代表に。

なるほど、無駄のない采配だ。さすが千冬さん。

「「……え?」」

私と一夏の声が重なった。

17（後書き）

神N「貴様この作品のプロットをざるへ隠した
乞食P「そんなものは初めからありません」

神N「嘘をつくな。貴様には罰を下さる。この者に逃れられぬ苦しみを永劫に下され続け」

乞食P「あぎやあああああつああああつー」

神N「どうだ天罰だ」

神P「あぎやあつて私だ」

神N「お前か」

神P「暇を持て余した」

神N「神々の」

N P「遊び」

N ikeとPuma

つていうか主人公の戦闘シーンに入れてないじゃん！

そして誰だよあのワンサマー！ めっちゃ熱血！ ワンサマーってかワン様だわ！

ワン様まじワンサマー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5074z/>

FateでIS

2012年1月5日23時16分発行